

構造関係共通事項

1. 総則

1. 1 適用範囲

(1) 構造関係共通図（配筋標準図）は、鉄筋コンクリート及び鉄骨鉄筋コンクリート造等における鉄筋の加工、組立等の一般的な標準図を表わす。

(2) 構造関係共通図（鉄骨標準図）は、鉄骨造及び鉄骨鉄筋コンクリート造における鉄骨の加工、組立の一般的な標準図を表わす。

(3) 構造関係共通図（配筋標準図、鉄骨標準図）以外については、図面及び監督職員の指示による。

1. 2 優先順位

(1) 設計図書間で配筋方法に相違がある場合の優先順位は以下のとおりとする。

1. 建築工事特記仕様書（構造関係）

2. 図面

構造関係共通図（配筋標準図、鉄骨標準図）

3. 国土交通省大臣官房官庁営繕部制定「公共建築工事標準仕様書（建築工事編）（令和4年版）」

1. 3 用語の定義

(1) 設計図とは、建築構造図のうち特記仕様書、構造関係共通図以外の図面をいう。

(2) 異形鉄筋の径（本文、図、表において「D、d」で示す）は、呼び名に用いた数値とする。

(3) 長さ、厚さ等の単位は、特記がなければmmとする。

1. 4 記号等

設計図中で使用する記号は、表1～表8、図1を標準とする。

表1 鉄筋の断面表示

区分	径	D10	D13	D16	D19	D22	D25	D29	D32
建 築		●	×	⊗	●	○	⊙	⊗	⊙

表2 各階伏図における記号

記 号	説 明	記 号	説 明
S°	スラブの配筋種別	⊕	杭の位置
◇	スラブ厚さ	⊙	試験杭の位置
○	階段の配筋種別	▨	打増しの範囲
D○	土間コンクリート	⊠	スラブ開口
□□□	コンクリートブロック壁（CB壁）	⊕	ボーリング位置
▨	梁・スラブの上がり下がりの範囲	(±)	FLからの上がり下がり
EW○○	耐力壁の種別	WO○	一般壁の種別
EW○○	片持スラブ形階段を受け、かつ耐力壁の種別	KWO○	片持スラブ形階段を受け、かつ耐力壁の種別
ERW○○	土圧を受け、かつ耐力壁の種別		

表3 梁貫通孔記号

区分	径	50	75	100	125	150	175	200	225	250	275	300	325	350	375	400
建 築		○	×	+	+	⊕	⊗	⊗	⊗	⊗	⊗	⊗	⊗	⊗	⊗	⊗

表4 スリーブ材質の凡例

管名	鋼管	溶融亜鉛めっき鋼板	硬質塩化ビニル管（薄肉管）	つば付き鋼管（黒管）
記号（建築用）	SP（白管）	GA	VU	RS
建築用以外のスリーブ材質は各工事による。				

表5 高力ボルト径の記号

区分	径	M12	M16	M20	M22	M24
高力ボルト（F10T、S10T）		●	●	●	●	●
溶融亜鉛めっき高力ボルト（F8T相当）		⊕	⊕	⊕	⊕	⊕

表6 普通ボルト径の記号

区分	径	M12	M16	M20	M22	M24
普通ボルト		○	⊕	⊕	⊕	⊕

表7 溶接方法、溶接継手及び溶接面の分類記号

溶 接 継 手	完全溶込み溶接	突合わせ継手	B
		T型継手	T
		かど継手	L
溶 接 面	隅肉溶接	部分溶込み溶接	F
			P
		重ねアーク溶接（フレア溶接）	FL
		片面溶接	1
溶 接 面	両面溶接		2

表8 溶接の補助記号

区 分	補 助 記 号
現 場 溶 接	▲
全 周 溶 接	○
全 周 現 場 溶 接	⊕
断面溶接の長さ及び間隔	LーP

図1 溶接記号の記載例

※特記無き限り、完全溶込溶接の溶接方法・溶接面は適切な溶接方法等による。

標準仕様書 5章 鉄筋工事 3節 加工及び組立よりの抜粋

5. 3. 2 加工

(2) 次の部分に使用する異形鉄筋の末端部にフックを付ける。

(ア) 柱の四隅にある主筋の重ね継手

(イ) 最上階の柱の四隅にある主筋の柱頭の定着

(ウ) 梁の出隅及び下端の両隅にある梁主筋の重ね継手（基礎梁を除く。）

(エ) 煙突の鉄筋（壁の一部となる場合を含む。）

(オ）杭基礎のベース筋

(カ）帯筋、あばら筋及び幅止め筋

柱

壁

梁

壁

梁

壁

図3.3 (5.3.2(2)の解説) 末端部にフックを必要とする出隅筋の鉄筋（●印）

(3) 鉄筋の折曲げ形状及び寸法は、表5.3.1による。

なお、異形鉄筋の径（この節の本文、図及び表において「d」で示す。）は、呼び名に用いた数値とする。

表5.3.1 鉄筋の折曲げ形状及び寸法				
折曲げ角度	折曲げ図	折曲げ内法直径(D)		
		鉄筋の種類 呼び名	SD295、SD345 D16以下	SD390 D19～D38
180°				
135°				
90°				
135°及び90° (幅止め筋)				

(注) 1. 片持スラブ先端、壁筋の自由端側の先端で90°フック又は135°フックを用いる場合には、余長を4d以上とする。

2. 90°未満の折曲げの内法直径は特記による。

5. 3. 4 継手及び定着

(1) 鉄筋の継手は、重ね継手、ガス圧接継手、機械式継手又は溶接継手とし、適用は特記による。

原則として、D35以上の異形鉄筋については、重ね継手を用いない。

(2) 鉄筋の継手位置は、特記による。

(3) 鉄筋の重ね継手は、次による。

なお、径が異なる鉄筋の重ね継手の長さは、細い鉄筋の径による。

(ア) 柱及び梁の主筋並びに耐力壁の鉄筋の重ね継手の長さは、特記による。特記がなければ、耐力壁の鉄筋の重ね継手の長さは、40d（軽量コンクリートの場合は50d）又は表5.3.2の重ね継手の長さのうちいずれか大きい値とする。

(イ）（ア）以外の鉄筋の重ね継手の長さは、表5.3.2による。

表5.3.2 鉄筋の重ね継手の長さ			
鉄筋の種類	コンクリートの設計基準強度 (F c) (N/mm ²)	L1 (フックなし)	L1 h (フックあり)
SD295	18	45d	35d
	21	40d	30d
	24、27	35d	25d
	30、33、36	35d	25d
SD345	18	50d	35d
	21	45d	30d
	24、27	40d	30d
	30、33、36	35d	25d
SD390	21	50d	35d
	24、27	45d	35d
	30、33、36	40d	30d

(注) 1. L1、L1 h：重ね継手の長さ及びフックありの重ね継手の長さ

2. L1 hは、図5.3.1に示すようにフック部分 l を含まない。

3. 軽量コンクリートの場合は、表の値に5 dを加えたものとする。

図5.3.1 フックありの重ね継手の長さ

(4) 隣り合う継手の位置は、表5.3.3Iによる。ただし、スラブ筋でD16以下の場合及び壁筋の場合は除く。

なお、先組み工法等で、柱及び梁の主筋のうち、隣り合う継手を同一面所に設ける場合は、特記による。

表5.3.3 隣り合う継手の位置

(5) 鉄筋の定着は、次による。

(ア) 鉄筋の定着の長さは、特記による。特記がなければ、表5.3.4Iによる。

表5.3.4 鉄筋の定着の長さ									
鉄筋の種類	コンクリートの設計基準強度 (F c) (N/mm ²)	直線定着の長さ				フックあり定着の長さ			
		L3		L1 h	L2 h	L1 h		L2 h	L3 h
		L1	L2			小梁	スラブ		
SD295	18	45d	40d	10d かつ 150mm以上	35d	20d	30d	25d	30d
	21	40d	35d						
	24、27	35d	30d						
	30、33、36	35d	30d						
SD345	18	50d	40d	(片持小梁の場合は25d)	35d	10d	30d	25d	—
	21	45d	35d						
	24、27	40d	35d						
	30、33、36	35d	30d						
SD390	21	50d	40d	(片持スラブの場合は25d)	35d	30d	25d	20d	—
	24、27	45d	40d						
	30、33、36	40d	35d						

(注) 1. L1、L1 h：2 から4 まで以外の直線定着の長さ及びフックありの定着の長さ

2. L2、L2 h：割裂破壊のおそれのない面所への直線定着の長さ及びフックありの定着の長さ

3. L3：小梁及びスラブの下端筋の直線定着の長さ。ただし、基礎耐圧スラブ及びこれを受ける小梁を除く。

4. L1 h：小梁の下端筋のフックありの定着の長さ

5. フックありの定着の場合は、図5.3.2Iに示すようにフック部分 l を含まない。また、中間部での折曲げは行わない。

6. 軽量コンクリートの場合は、表の値に5 dを加えたものとする。

図5.3.2 直線定着の長さ及びフックありの定着の長さ

(イ) 仕口面に縦に折り曲げて定着する鉄筋の定着長さ L1 が、表5.3.4のフックありの定着の長さを確保できない場合の折曲げ定着の方法は、特記による。特記がなければ、図5.3.3Iにより、次の(a)から(c)までを全て満足するものとする。

(a) 全長は、表5.3.4の直線定着の長さ以上とする。

(b) 余長は8d以上とする。

(c) 仕口面から鉄筋外面までの投影定着長さLa及びLbは、表5.3.5Iに示す長さとする。ただし、梁主筋の柱内定着においては、柱せいの3/4倍以上とする。

図5.3.3 折曲げ定着の方法

表5.3.5 投影定着長さ			
鉄筋の種類	コンクリートの設計基準強度 (F c) (N/mm ²)	La	Lb
SD295	18	20d	15d
	21	15d	15d
	24、27	15d	15d
	30、33、36	15d	15d
SD345	18	20d	20d
	21	20d	20d
	24、27	20d	15d
	30、33、36	15d	15d
SD390	21	20d	20d
	24、27	20d	20d
	30、33、36	20d	15d

(注) 1. La：梁主筋の柱内折曲げ定着の投影定着長さ（基礎梁、片持梁及び片持スラブを含む。）

2. Lb：小梁及びスラブの上端筋の梁内折曲げ定着の投影定着長さ（片持小梁及び片持スラブを除く。）

3. 軽量コンクリートの場合は、表の値に5 dを加えたものとする。

(6) 溶接金網及びスパイラル筋の継手及び定着は、次による。

(ア) 溶接金網の継手及び定着は、図5.3.4Iによる。

なお、L1 は表5.3.2Iに、L2 及び L3 は表5.3.4Iによる。

図5.3.4 溶接金網の継手及び定着

(イ) スパイラル筋の継手及び定着は、図5.3.5Iによる。

図5.3.5 スパイラル筋の継手及び定着

5. 3. 5 鉄筋のかぶり厚さ及び間隔

(1) 鉄筋及び溶接金網の最小かぶり厚さは、特記による。特記がなければ、表5.3.6Iによる。ただし、柱及び梁の主筋にD29 以上を使用する場合は、主筋のかぶり厚さを径の1.5倍以上確保するように最小かぶり厚さを定める。

表5.3.6 鉄筋及び溶接金網の最小かぶり厚さ		
構造部分の種類		
土に接しない部分	スラブ、耐力壁以外の壁	仕上がりあり 仕上がりなし
	柱、梁、耐力壁	屋 内
		仕上がりあり
		仕上がりなし
	屋 外	仕上がりあり
		仕上がりなし
土に接する部分	換壁、耐圧スラブ	40
	柱、梁、スラブ、壁	40
	基礎、換壁、耐圧スラブ	60
	煙突等高熱を受ける部分	60

(注) 1. この表は、普通コンクリートに適用し、軽量コンクリートには適用しない。また、塩害を受けるおそれある部分等耐久性上不利な箇所には適用しない。

2. 「仕上がりあり」とは、モルタル塗り等の仕上がりのあるものとし、鉄筋の耐久性上有効でない仕上げ（仕上塗材、塗装等）のものを除く。

3. スラブ、梁、基礎及び換壁で、直接土に接する部分のかぶり厚さには、捨コンクリートの厚さを含まない。

4. 杭基礎の場合の基礎下端筋のかぶり厚さは、杭天端からとする。

(2) 柱、梁等の鉄筋の加工に用いるかぶり厚さは、最小かぶり厚さに10mmを加えた数値を標準とする。

(3) 鉄筋組立後のかぶり厚さは、最小かぶり厚さ以上とする。

(4) 鉄筋相互のあきは図5.3.6Iにより、次の値のうち最大のもの以上とする。ただし、機械式継手及び溶接継手の場合は、5 節又は6 節による。

(ア) 粗骨材の最大寸法1.25倍

(イ) 25mm

(ウ) 隣り合う鉄筋の径 標準仕様書（5.3.2(3)による）d の平均の1.5倍

図5.3.6 鉄筋相互のあき及び間隔

(5) 鉄骨鉄筋コンクリート造の場合、主筋と平行する鉄骨とのあきは、(4)による。

(6) 貫通孔に接する鉄筋のかぶり厚さは、最小かぶり厚さ以上とする。

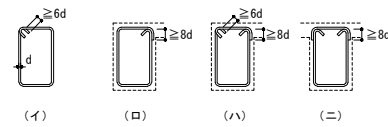
<代表設計者> 一級建築士 大臣登録 第52731号 柴 恭		06国補都構 常陸太田市新総合体育館新築工事	
<構造設計者> 一級建築士 大臣登録 第178097号 構造設計一級建築士証交付番号 第6499号 酒 寄 光一	S	建築工事	最終版 2024年12月
	01	構造関係共通事項（構造関係共通事項）	
	株式会社 柴建築設計事務所		

(2023年版)

20230220

3. 2 あばら筋（小梁、片持梁、基礎梁含む）の組立て形及び割付け等

（1）あばら筋組立ての形及びフックの位置

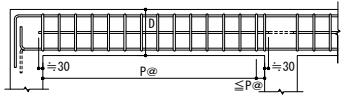


- （イ）形を標準とする。ただし、L形梁の場合は、（ロ）又は（ハ）、T形梁の場合は、（ロ）～（ニ）とすることができる。
- フックの位置は、（イ）の場合は交互とし、（ロ）の場合は、L形ではスラブの付く側、T形では交互とする。なお、（ハ）の場合は床版の付く側を90°折曲げとする。

図3.5 あばら筋組立ての形

（2）あばら筋の割付け

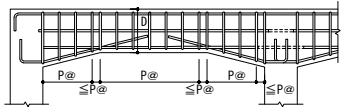
（ア）間隔が一律でハンチのない場合



- あばら筋は、柱面の位置から割り付ける。
- 図中P@は、特記されたあばら筋の間隔を示す。

図3.6 あばら筋の割付け（その1）

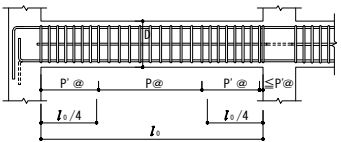
（イ）間隔が一律でハンチがある場合



- あばら筋は、柱面の位置及びハンチに切り替わる位置から割り付ける。
- 図中P@は、特記されたあばら筋の間隔を示す。

図3.7 あばら筋の割付け（その2）

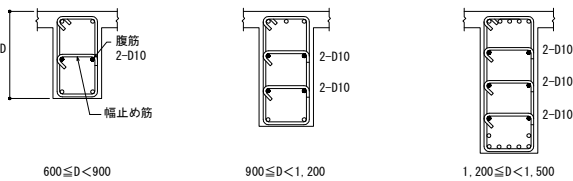
（ウ）梁の端部で間隔の異なる場合



- あばら筋は、柱面の位置から割り付ける。
- 図中P@、P'@は、特記されたあばら筋の間隔を示す。

図3.8 あばら筋の割付け（その3）

（3）腹筋及び幅止め筋



- 腹筋に継手を設ける場合の継手長さは、150mm程度とする。
- 幅止め筋及び受け用幅止め筋は、D10-1,000程度とする。

図3.9 腹筋及び幅止め筋

3. 4 小梁主筋の継手、定着及び余長

（1）連続小梁の場合

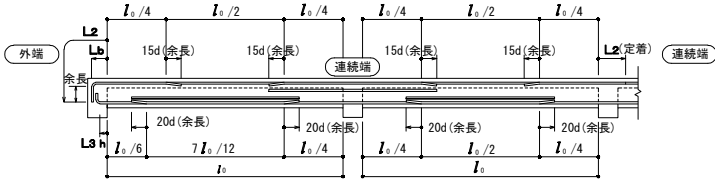


図3.10 小梁主筋の継手、定着及び余長(その1)

（2）単独小梁の場合

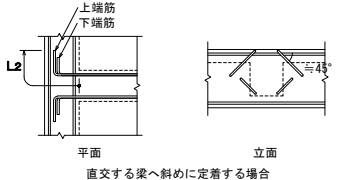
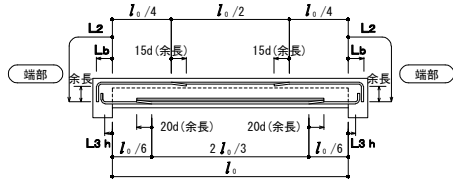
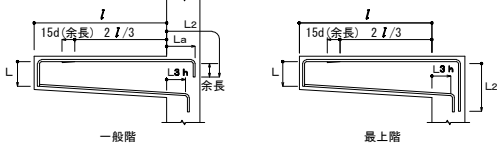


図3.11 小梁主筋の継手、定着及び余長(その2)

- 印は、余長位置を示す。
- 梁せいが小さく垂直で余長がとれない場合、斜めにしても良い。
- 図示のない事項は、1.3及び3.11に準ずる。
- Lshを確認できない場合は、標準仕様書（5.3.4(5)(イ)）によることができる。

3. 5 片持梁主筋の継手、定着及び余長

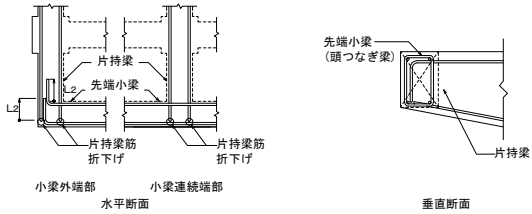
（1）先端に小梁のない場合



- 印は、余長位置を示す。
- 先端の折曲げの長さLは、梁せいからかり厚さを除いた長さとする。
- 図時のない事項は、3.11による。
- Laの数値は、原則として、柱せいの3/4倍以上とする。
- Lshを確認できない場合は、標準仕様書（5.3.4(5)(イ)）によることができる。

図3.12 片持梁主筋の定着及び余長

（2）先端に小梁がある場合



- 図示のない事項は、（1）による。
- 先端小梁終端部の主筋は、片持梁内に水平定着する。
- 先端小梁の連続端は、片持梁の先端を貫通する通し筋としてよい。

図3.13 片持梁主筋の定着

4. 1 壁の配筋

（1）壁の配筋は表4.1による。

表4.1 壁の配筋

種別	縦筋及び横筋	断面図 (mm)
W12	D10-200@シングル	120
W15A	D10-150@シングル	150
W15B	D10-100@シングル	150
W18A	D10-200@ダブル	180
W18B	D10-150@ダブル	180
W20A	D10-200@ダブル	200
W20B	D10-150@ダブル	200

（注）壁筋の配筋順序は、規定しない。

（2）片持スラブ階段を受ける壁の配筋は表4.2による。

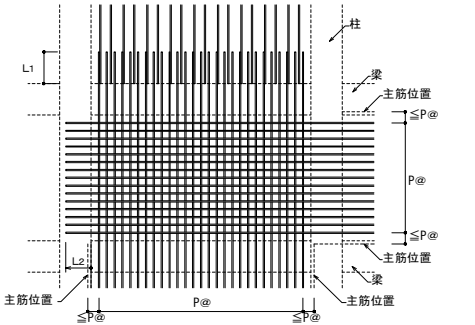
表4.2 片持スラブ階段を受ける壁の配筋

種別	縦筋及び横筋	断面図 (mm)	階段の配筋種別(表6.1)
KW1	縦筋	D13-200@ダブル	KA1
	横筋	D10-200@ダブル	KA3
KW2	縦筋	D13-150@ダブル	KA2
	横筋	D10-200@ダブル	KA4

（注）縦筋は、横筋の外側に配筋する。

（3）土圧を受ける壁の配筋は、構造図による。

4. 2 壁の継手及び定着



- 図中のP@は、特記された壁筋の間隔を示す。
- 壁配筋の重ね継手はL1、定着長さはL2とし、鉄筋の継手位置は柱・梁以外とする。
- 幅止め筋は、縦横ともD10-1,000程度とする。

図4.1 壁の配筋

4. 3 壁の交差部及び端部の配筋

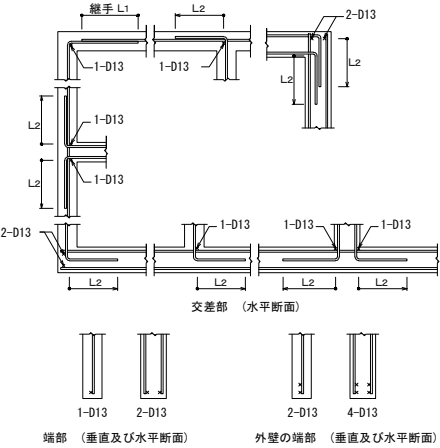


図4.2 壁の交差部及び端部の配筋

4. 4 壁の開口部補強

（1）耐震壁を除く壁開口部の補強筋は、A形は表4.3、B形は表4.4とする。

表4.3 壁開口部補強筋（A形）

壁の種別	補強筋	
	縦横	斜め
W12、W15	1-D13	1-D13
W18、W20	2-D13	2-D13

表4.4 壁開口部補強筋（B形）

壁の種別	補強筋	
	縦横	斜め
W12、W15	2-D13	1-D13
W18、W20	4-D13	2-D13

（2）壁開口部補強筋の定着長さは図4.3による。

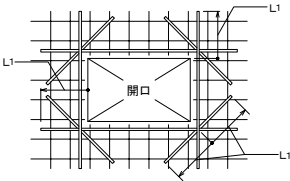


図4.3 壁開口部補強筋の定着長さ

- 開口部は柱及び梁に接する部分又は鉄筋を緩やかに曲げることにより開口部を避けて配筋できる場合は、補強を省略することができる。
- コンセントボックス等を壁に埋め込む場合の補強は、構造図による。

4. 5 バラベット

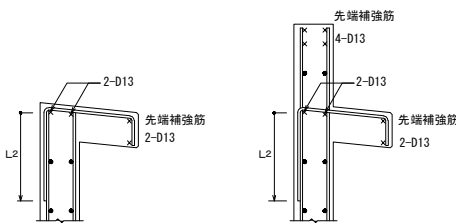


図4.4 バラベットの配筋

5. 1 スラブの配筋		5. 3 片持スラブの配筋		5. 6 出隅部及び入隅部の補強		5. 8 段差のあるスラブの補強																																																																															
表5.1 スラブの配筋 <table><tr><th>配筋種別</th><th>短辺方向（主筋） 全域</th><th>長辺方向（配力筋） 全域</th><th>配筋種別</th><th>短辺方向（主筋） 全域</th><th>長辺方向（配力筋） 全域</th></tr><tr><td>S 1</td><td>D13-100#</td><td>D13-100#</td><td>S 8</td><td>D10、D13-150#</td><td>D10-150#</td></tr><tr><td>S 2</td><td>同上</td><td>D13-150#</td><td>S 9</td><td>同上</td><td>D10-200#</td></tr><tr><td>S 3</td><td>同上</td><td>D10、D13-150#</td><td>S10</td><td>D10、D13-200#</td><td>D10、D13-200#</td></tr><tr><td>S 4</td><td>D13-150#</td><td>D13-150#</td><td>S11</td><td>同上</td><td>D10-200#</td></tr><tr><td>S 5</td><td>同上</td><td>D10、D13-150#</td><td>S12</td><td>同上</td><td>D10-250#</td></tr><tr><td>S 6</td><td>同上</td><td>D10-150#</td><td>S13</td><td>D10-200#</td><td>D10-200#</td></tr><tr><td>S 7</td><td>D10、D13-150#</td><td>D10、D13-150#</td><td>S14</td><td>同上</td><td>D10-250#</td></tr></table> （注）上端筋、下端筋とも同一配筋とする。 1. 配筋の割付けは、中央から行い、端部は定められた間隔以下とする。 2. 鉄筋の重ね継手長さは、L1 とする。 3. 土間コンクリート補強筋の配筋及びコンクリート厚さは、構造図による。 図9.1 スラブの配筋		配筋種別	短辺方向（主筋） 全域	長辺方向（配力筋） 全域	配筋種別	短辺方向（主筋） 全域	長辺方向（配力筋） 全域	S 1	D13-100#	D13-100#	S 8	D10、D13-150#	D10-150#	S 2	同上	D13-150#	S 9	同上	D10-200#	S 3	同上	D10、D13-150#	S10	D10、D13-200#	D10、D13-200#	S 4	D13-150#	D13-150#	S11	同上	D10-200#	S 5	同上	D10、D13-150#	S12	同上	D10-250#	S 6	同上	D10-150#	S13	D10-200#	D10-200#	S 7	D10、D13-150#	D10、D13-150#	S14	同上	D10-250#	表5.2 CS形配筋 <table><tr><th>配筋種別</th><th>主筋</th><th>配筋種別</th><th>主筋</th></tr><tr><td rowspan="2">CS1</td><td>上 D13-100# 下 D13-200#</td><td rowspan="2">CS5</td><td>上 D10-200# 下 D10-400#</td></tr><tr><td></td><td></td></tr><tr><td rowspan="2">CS2</td><td>上 D13-150# 下 D13-300#</td><td rowspan="2">CS6</td><td>上 D10、D13-200# 下 —</td></tr><tr><td></td><td></td></tr><tr><td rowspan="2">CS3</td><td>上 D10、D13-150# 下 D10、D13-300#</td><td rowspan="2">CS7</td><td>上 D10-200# 下 —</td></tr><tr><td></td><td></td></tr><tr><td rowspan="2">CS4</td><td>上 D10、D13-200# 下 D10-200#</td><td></td><td></td></tr><tr><td></td><td></td><td></td><td></td></tr></table> 図5.4 片持スラブの配筋 (CS1 から CS5) 図5.5 片持スラブの配筋 (CS6 及び CS7) 1. 先端の折曲げ長さL1は、スラブ厚さよりかぶり厚さを除いた長さとする。 2. スラブに段差のない場合は、主筋を引き通してスラブに定着してもよい。		配筋種別	主筋	配筋種別	主筋	CS1	上 D13-100# 下 D13-200#	CS5	上 D10-200# 下 D10-400#			CS2	上 D13-150# 下 D13-300#	CS6	上 D10、D13-200# 下 —			CS3	上 D10、D13-150# 下 D10、D13-300#	CS7	上 D10-200# 下 —			CS4	上 D10、D13-200# 下 D10-200#							(1) 屋根スラブの出隅及び入隅部 図5.8 出隅及び入隅部の補強配筋 1. 補強筋を上下筋の下側に配置する。 (2) 片持スラブの出隅部 図5.9 片持スラブ出隅部の補強配筋 1. $I_1 \geq I_2$ とする。 2. 出隅受け部配筋は柱又は梁に L_1 定着する。		図5.12 段差のあるスラブの補強配筋 1. 150mm以下の段差のあるスラブの場合に限る。	
配筋種別	短辺方向（主筋） 全域	長辺方向（配力筋） 全域	配筋種別	短辺方向（主筋） 全域	長辺方向（配力筋） 全域																																																																																
S 1	D13-100#	D13-100#	S 8	D10、D13-150#	D10-150#																																																																																
S 2	同上	D13-150#	S 9	同上	D10-200#																																																																																
S 3	同上	D10、D13-150#	S10	D10、D13-200#	D10、D13-200#																																																																																
S 4	D13-150#	D13-150#	S11	同上	D10-200#																																																																																
S 5	同上	D10、D13-150#	S12	同上	D10-250#																																																																																
S 6	同上	D10-150#	S13	D10-200#	D10-200#																																																																																
S 7	D10、D13-150#	D10、D13-150#	S14	同上	D10-250#																																																																																
配筋種別	主筋	配筋種別	主筋																																																																																		
CS1	上 D13-100# 下 D13-200#	CS5	上 D10-200# 下 D10-400#																																																																																		
CS2	上 D13-150# 下 D13-300#	CS6	上 D10、D13-200# 下 —																																																																																		
CS3	上 D10、D13-150# 下 D10、D13-300#	CS7	上 D10-200# 下 —																																																																																		
CS4	上 D10、D13-200# 下 D10-200#																																																																																				
5. 2 スラブ筋の定着及び受け筋		5. 4 片持スラブの先端に壁が付く場合の配筋		5. 7 スラブの打継ぎの補強等																																																																																	
図5.2 スラブ筋の定着長さ及び受け筋 (その1) 図5.3 スラブ筋の定着長さ及び受け筋 (その2)		図5.6 先端に壁が付く場合の配筋		(1) 土間スラブの打継ぎ補強（基礎梁とスラブを一体打ちとしないで、打継ぎを設ける場合の補強を示す。） 図5.10 打継ぎ補強配筋 1. 土間コンクリートとは、土に接するスラブのうち、床荷重を直接地盤へ伝達できるものをいい、それ以外は土間スラブとして、梁及び柱を介して基礎へ荷重を伝達するものとする。 2. aが300mm以下の場合に限る。 (2) 土間コンクリートと基礎梁との接合部配筋 図5.11 土間コンクリートと基礎梁との接合部配筋 1. 土間コンクリートとは、土に接するスラブのうち、床荷重を直接地盤へ伝達できるものをいい、それ以外は土間スラブとして、梁及び柱を介して基礎へ荷重を伝達するものとする。 2. aが300mm以下の場合に限る。																																																																																	
		5. 5 スラブの開口部の補強																																																																																			
		図5.7 スラブ開口部の補強配筋 1. スラブ開口によって切られる鉄筋と同量の鉄筋で周囲を補強し、隅角部に斜め方向に2-D13 (I =2L1) シングルを上下筋の内側に配筋する。 2. スラブ開口の最大径が両方向の鉄筋間隔以下で、鉄筋を緩やかに曲げることで、開口部を避けて配筋できる場合は、補強を省略することができる。 3. スラブ開口の最大径が700mm以下の場合に限る。																																																																																			

＜代表設計者＞
一級建築士 大臣登録 第52731号
柴 恭

＜構造設計者＞
一級建築士 大臣登録 第178097号
構造設計一級建築士証交付番号 第6499号
酒寄 光一

06国補都構 常陸太田市新総合体育館新築工事

S 建築工事

04 構造関係共通事項（配筋標準図 その3）

株式会社 柴建築設計事務所

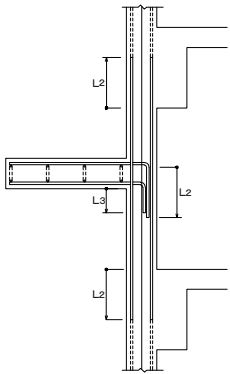
最終版 2024年12月

2023年版

202302

6. 1 片持スラブ形階段の配筋

表6.1 片持スラブ形階段の配筋		
配筋種別	KA1	KA2
配筋図		
配筋種別	KA3	KA4
配筋図		



1. 壁配筋は、4.1(2)による。
2. 階段主筋は、壁の中心線を越えてから縦に下ろす。
3. スラブ配力筋の継手及び定着長さは、標準仕様書（表5.3.4）の L3 とする。

図6.1 片持スラブ形階段配筋の定着

6. 2 二辺固定スラブ形階段の配筋

表6.2 二辺固定スラブ形配筋	
配筋種別	上端筋、下端筋とも(全域)
KB1	D13-200#
KB2	D13-150#
KB3	D13-100#
KB4	D13, D16-150#
KB5	D16-150#
KB6	D16-125#
KB7	D16-100#

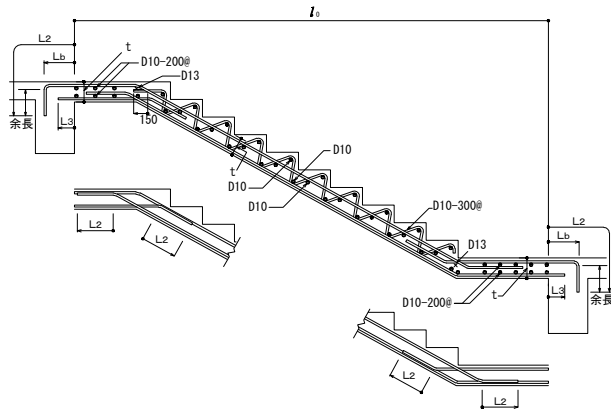
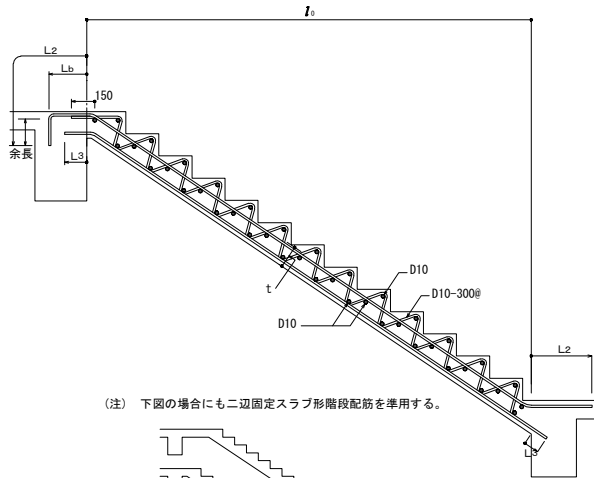


図6.2 二辺固定スラブ形階段配筋(その1)



(注) 下図の場合にも二辺固定スラブ形階段配筋を準用する。

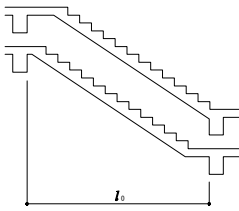


図6.3 二辺固定スラブ形階段配筋(その2)

7. 1 梁貫通孔の配筋

- (1) 梁貫通孔補強筋の名称等は、図7.1による。
- (2) 孔の径は、梁せいの1/3以下とし、孔が円形でない場合はこれの外接円とする。
- (3) 孔の上下方向の位置は梁せい中心付近とし、梁中央部下端は梁下端よりD/3（Dは梁せい）の範囲には設けてはならない。
- (4) 孔は、柱面から、原則として、1.5D以上離す。ただし、基礎梁及び壁付帯梁は除く。
- (5) 孔が並列する場合の中心間隔は、孔の径の平均値の3倍以上とする。
- (6) 縦筋及び上下縦筋は、あばら筋の形に配筋する。
- (7) 補強筋は、主筋の内側とする。また、鉄筋の定着長さは、図7.2による。
- (8) 孔の径が梁せいの1/10以下、かつ、150mm未満のものは、鉄筋を緩やかに曲げるにより、開口部を避けて配筋できる場合は、補強を省略することができる。
- (9) 溶接金網の余長は1格子以上とし、突出しは10mm以上とする。
- (10) 溶接金網の貫通孔部分には、鉄筋1-13φのリング筋を取り付ける。
なお、リング筋は、溶接金網に4箇所以上溶接する。
- (11) 溶接金網の割付け始点は、横筋であばら筋の下側とし、縦筋では貫通孔の中心とする。
- (12) 他の開孔を設けない範囲は図7.3による。

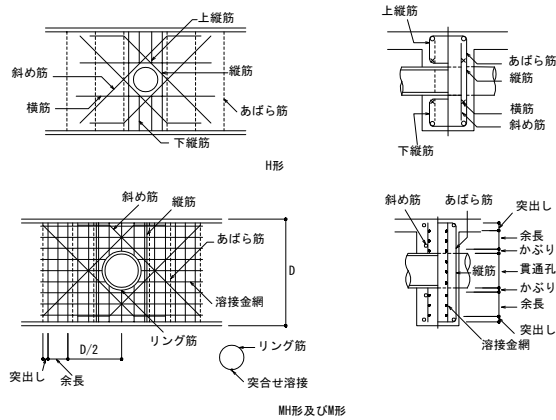


図7.1 梁貫通孔補強筋の名称等

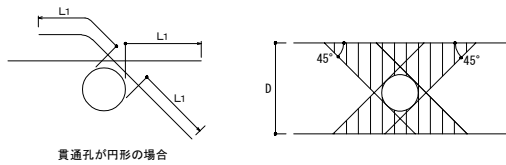


図7.2 補強筋の定着長さ

図7.3 他の開孔を設けない範囲

- (13) 梁貫通補強は、監督員の承認を得て既製品（一般評定品）を用いることができる。
既製品による補強は、評定条件を満足する範囲内で行うこと。

7. 2 梁貫通孔の補強形式

表7.1 H形配筋					
配筋種別	斜め筋	縦筋	横筋	上下縦筋	配筋図
H1	2-2-D13	なし	なし	なし	
H2		2-2-D13			
H3	4-2-D13	2-2-D13	2-2-D13	2-2-D13	
H4	4-2-D16				
H5	4-2-D16	4-2-D13	2-2-D13	3-2-D13	
H6	4-2-D19				
H7	4-2-D22				
H8	4-4-D22	4-2-D13	2-2-D13	3-2-D13	
H9	4-4-D22	4-2-D16	2-2-D13	3-2-D13	
H10	4-4-D25	4-2-D16	2-2-D13	3-2-D13	
H11	6-4-D25	4-2-D16	2-2-D13	3-2-D13	
H12	6-4-D29	4-2-D16	2-2-D13	3-2-D13	
H13	6-6-D32	4-2-D16	2-2-D13	3-2-D13	

(注) ----- は、一般部分のあばら筋を示す。

表7.2 M形配筋

配筋種別	縦筋	溶接金網	配筋図
M1	2-2-D13	なし	
M2	4-2-D13		
M3	4-2-D13	2-6φ-100#	
M4	6-2-D13		

(注) ----- は、一般部分のあばら筋を示す。

表7.3 MH形配筋

配筋種別	斜め筋	縦筋	溶接金網	配筋図
MH1	2-2-D13	なし	なし	
MH2		2-2-D13		
MH3	2-2-D13	2-2-D13	2-6φ-100#	
MH4	4-2-D13			
MH5	4-2-D16			
MH6	4-2-D16	4-2-D13	2-6φ-100#	
MH7	4-2-D19			
MH8	4-2-D22	4-2-D13	2-6φ-100#	
MH9	4-2-D25	4-2-D13	2-6φ-100#	
MH10	4-2-D29	4-2-D13	2-6φ-100#	

(注) ----- は、一般部分のあばら筋を示す。

7. 3 コンクリートブロック帳壁との取合い

- (1) 控壁の配筋

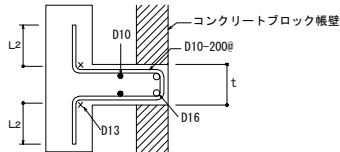


図7.3 控壁の配筋(水平、垂直とも)

- (2) 帳壁が土間コンクリート上に設置される場合の補強

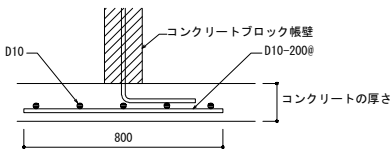


図7.4 壁付き土間コンクリートの補強配筋

構造関係共通事項（鉄骨標準図）

1. 1 縁端距離及びボルト間隔等

(1) 縁端距離及びボルト間隔

縁端距離及びボルト間隔は、表1.1による。

ただし、引張材の接合部分において、せん断力を受けるボルトが応力方向に3本以上並ばない場合の縁端距離は、構造図による。構造図がなければ、ボルト軸径の2.5倍以上とする。

また、アンカーボルトの縁端距離は構造図による。

表1.1 縁端距離及びボルト間隔（単位：mm）

ねじの呼び	縁端距離 e	ボルト間隔 p
M12	40	60
M16		
M20		
M22		
M24	45	70

(2) 千鳥打ちのゲージ及びボルト間隔

千鳥打ちのゲージ及びボルト間隔は、表1.2による。

表1.2 千鳥打ちのゲージ及びボルト間隔（単位：mm）

ゲージ g	千鳥打ちのボルト間隔 Pt	
	ねじの呼び	
	M12, M16, M20, M22	M24
35	50	65
40	45	60
45	40	55
50	35	50
55	25	45
60	—	40

(3) 形鋼のゲージ及びボルトの最大軸径

形鋼のゲージ及びボルトの最大軸径は、表1.3による。

表1.3 形鋼のゲージ及びボルトの最大軸径（単位：mm）

A又はB				B			B			
A又はB	g ₁	g ₂	最大軸径	B	g ₁	g ₂	最大軸径	B	g ₃	最大軸径
45	25		12	100	56		16	50	30	12
50	28		16	125	75		16	65	35	20
60	35		16	150	90		22	70	40	20
65	35		20	175	105		22	75	40	22
70	40		20	200	120		24	80	45	22
75	40		22	250	150		24	90	50	24
80	45		22	300	150		24	100	55	24
90	50		24	350	140	70	24			
100	55		24	400	140	90	24			
125	50	35	24	※1 千鳥打ちとした場合						
130	50	40	24							
150	55	55	24							
175	60	70	24							
200	60	90	24							

1. 2 溶接継手の種類別開先標準

突合せ継手の開先標準

(単位：mm)

H（被覆アーク溶接、ガスシールドアーク溶接及びセルフシールドアーク溶接）				A（サブマージアーク自動溶接）			
1（片面溶接）	2（両面溶接）	1（片面溶接）	2（両面溶接）	1（片面溶接）	2（両面溶接）	1（片面溶接）	2（両面溶接）
t ≤ 6		t ≤ 12		t ≤ 6		t ≤ 12	
G = t							
6 < t ≤ 19		12 < t ≤ 22		6 < t ≤ 19		12 < t ≤ 19	
19 < t ≤ 40		22 < t ≤ 40		19 < t ≤ 40		22 < t ≤ 40	
D1 = 2(t-2)/3 D2 = (t-2)/3		D1 = (t-6)/2 D2 = (t-6)/2					

H（被覆アーク溶接、ガスシールドアーク溶接 及びセルフシールドアーク溶接）				A（サブマージアーク自動溶接）			
1（片面溶接）		2（両面溶接）		1（片面溶接）		2（両面溶接）	
t ≤ 6				t ≤ 12			
1/4t ≤ S ≤ 10				1/4t ≤ S ≤ 10			
6 < t ≤ 19				12 < t ≤ 22			
1/4t ≤ S ≤ 10		1/4t ≤ S ≤ 10		1/4t ≤ S ≤ 10		1/4t ≤ S ≤ 10	
19 < t ≤ 40				22 < t ≤ 40			
1/4t ≤ S ≤ 10		D1 = 2(t-2)/3 D2 = (t-2)/3 1/4t ≤ S ≤ 10		1/4t ≤ S ≤ 10		D1 = (t-6)/2 D2 = (t-6)/2 1/4t ≤ S ≤ 10	

部材が直交しない場合の開先標準

H（被覆アーク溶接、ガスシールドアーク溶接 及びセルフシールドアーク溶接）				A（サブマージアーク自動溶接）			
1（片面溶接）		2（両面溶接）		1（片面溶接）		2（両面溶接）	
6 < t ≤ 40				19 < t ≤ 40			
1/4t ≤ S ≤ 10		1/4t ≤ S ≤ 10		1/4t ≤ S ≤ 10			

かど継手の開先標準

H（被覆アーク溶接、ガスシールドアーク溶接 及びセルフシールドアーク溶接）				A（サブマージアーク自動溶接）			
1（片面溶接）		2（両面溶接）		1（片面溶接）		2（両面溶接）	
t ≤ 6				t ≤ 12			
S = t							
6 < t ≤ 19				12 < t ≤ 19			
1/4t ≤ S ≤ 10		1/4t ≤ S ≤ 10		1/4t ≤ S ≤ 10		1/4t ≤ S ≤ 10	
19 < t ≤ 40				19 < t ≤ 40			
D1 = 2(t-2)/3 D2 = (t-2)/3 1/4t ≤ S ≤ 10		D1 = 2(t-2)/3 D2 = (t-2)/3 1/4t ≤ S ≤ 10		D1 = (t-6)/2 D2 = (t-6)/2 1/4t ≤ S ≤ 10		D1 = (t-6)/2 D2 = (t-6)/2 1/4t ≤ S ≤ 10	

隅肉溶接の開先標準 (単位: mm)	
H (被覆アーク溶接、ガスシールドアーク溶接及びセルフシールドアーク溶接)	
1 (片面溶接)	2 (両面溶接)
$t \leq 16$	$t \leq 16$ $16 < t \leq 40$

隅肉溶接のサイズ (単位: mm)	
t	4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 19 22 25 28 32 36 40
S	3 4 5 5 6 7 8 8 9 10 10 11 12 11 13 15 17 19 21 24

部分溶込み溶接の開先標準 (単位: mm)																					
H (被覆アーク溶接、ガスシールドアーク溶接及びセルフシールドアーク溶接)																					
1 (片面溶接)	2 (両面溶接)																				
$12 \leq t \leq 40$	$16 \leq t \leq 40$																				
<table border="1"> <tr> <td>t</td><td>12</td><td>16</td><td>19</td><td>22</td><td>25</td><td>28</td><td>32</td><td>36</td><td>40</td></tr> <tr> <td>D</td><td>10</td><td>11</td><td>12</td><td>13</td><td>13</td><td>14</td><td>15</td><td>15</td><td>16</td></tr> </table> $1/4t \leq S \leq 10$	t	12	16	19	22	25	28	32	36	40	D	10	11	12	13	13	14	15	15	16	$D1 = (t-2)/2$ $D2 = (t-2)/2$ $1/4t \leq S \leq 10$
t	12	16	19	22	25	28	32	36	40												
D	10	11	12	13	13	14	15	15	16												

重ねアーク溶接（フレア溶接）の開先標準 (単位: mm)			
H (被覆アーク溶接、ガスシールドアーク溶接及びセルフシールドアーク溶接)			
1 (丸鋼等片面溶接)	2 (丸鋼等両面溶接)	3 (軽量形鋼V形溶接)	4 (軽量形鋼レ形溶接)
$d/2$ $d/2$	$d/2$ $d/2$ $d/2$ $d/2$	$t \geq 3$ のとき $S = t$ $t < 3$ のとき $S = 3$	$t \geq 3$ のとき $S = t$ $t < 3$ のとき $S = 3$

1. 3 鋼管分岐継手詳細

自動機械により開先加工を行う場合はその限りではない。 (単位: mm)	
適用管厚	$3.2\text{mm} \leq t \leq 12\text{mm}$
交角	$30^\circ \leq \theta \leq 150^\circ$
D-D断面図 主管の管軸と支管の管軸とは一致させること。	

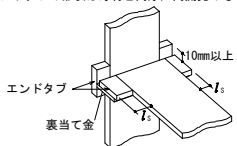
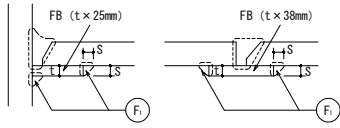
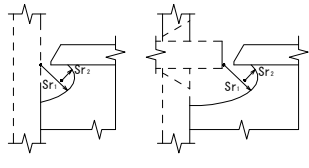
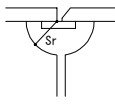
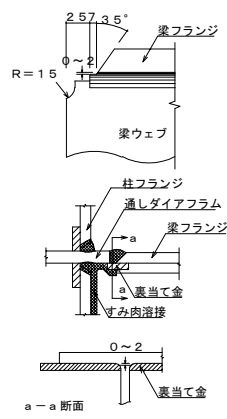
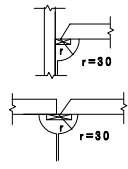
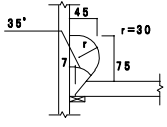
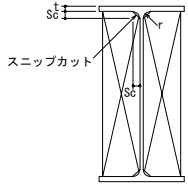
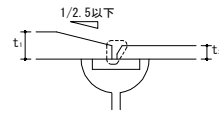
<代表設計者

一級建築士

<構造設計者

一級建築士

構造設計一

1. 4 鉄骨溶接施工																							
(1) エンドタブ・裏当て金の鋼材の種類及び引張強さによる区分は、母材と同等とする。 (2) エンドタブ エンドタブの形状は母材と同厚、同開先のものとする。 <table><tr><th colspan="2">エンドタブの長さ（単位：mm）</th></tr><tr><th>溶接方法</th><th>I_s</th></tr><tr><td>手 溶 接</td><td>35以上</td></tr><tr><td>半自動溶接</td><td>38以上</td></tr><tr><td>自 動 溶 接</td><td>70以上</td></tr></table>				エンドタブの長さ（単位：mm）		溶接方法	I_s	手 溶 接	35以上	半自動溶接	38以上	自 動 溶 接	70以上										
エンドタブの長さ（単位：mm）																							
溶接方法	I_s																						
手 溶 接	35以上																						
半自動溶接	38以上																						
自 動 溶 接	70以上																						
(3) 裏当て金 裏当て金の溶接 (ア) 裏当て金の組立溶接は、接合部に影響を与えないように、エンドタブの位置又は梁フランジ幅の1/4の位置に行い、梁フランジ両端から10mm以内の位置には行ってはならない。 (イ) 完全溶込み溶接の片面溶接に用いる裏当て金は原則としてフランジの内側に設置する。 <table><tr><th colspan="2">裏当て金の厚さ（単位：mm）</th><th colspan="2">溶接のサイズ（単位：mm）</th></tr><tr><th>溶接方法</th><th>t</th><th>裏当て金の厚さ</th><th>S</th></tr><tr><td>手 溶 接</td><td>6以上</td><td>$t \leq 9$</td><td>5</td></tr><tr><td>半自動溶接</td><td>9以上</td><td>$t > 9$</td><td>9</td></tr><tr><td>自 動 溶 接</td><td>12以上</td><td></td><td></td></tr></table>				裏当て金の厚さ（単位：mm）		溶接のサイズ（単位：mm）		溶接方法	t	裏当て金の厚さ	S	手 溶 接	6以上	$t \leq 9$	5	半自動溶接	9以上	$t > 9$	9	自 動 溶 接	12以上		
裏当て金の厚さ（単位：mm）		溶接のサイズ（単位：mm）																					
溶接方法	t	裏当て金の厚さ	S																				
手 溶 接	6以上	$t \leq 9$	5																				
半自動溶接	9以上	$t > 9$	9																				
自 動 溶 接	12以上																						
(4) スカラップ 改良型スカラップ (ア) スカラップ半径 Sr_1 は35mmとする。Sr_2 は10mmとする。 (イ) スカラップ円弧の曲線は、フランジに滑らかに接するように加工し、複合円は滑らかに仕上げる。  従来型スカラップ スカラップ半径 Sr は35mmとする。 																							
ノンスカラップ ①施工要領書に明記し監督職員の承諾を得ること。  ●ウェブフィレットと裏当て金が必要 するように裏当て金にウェブフィレットと同様のアール加工をする。																							
(3-1) 梁フランジの現場溶接は下記の要領による。  現場溶接の梁下端フランジ部スカラップ 																							
(5) スニップカット (ア) スニップカット部は溶接により埋めるものとする。 <table><tr><th colspan="5">スニップカットの寸法（単位：mm）</th></tr><tr><th>t</th><td>6</td><td>9</td><td>12</td><td>16以上</td></tr><tr><th>Sc</th><td>10</td><td>12</td><td>14</td><td>15</td></tr></table> ただし、既製形鋼のスニップカットについては、$Sc = r + 2$により求めるものとする。				スニップカットの寸法（単位：mm）					t	6	9	12	16以上	Sc	10	12	14	15					
スニップカットの寸法（単位：mm）																							
t	6	9	12	16以上																			
Sc	10	12	14	15																			
(6) 溶接部分の段差 (ア) 完全溶込み溶接を行う部分の板厚の差による段違いが10mmを超える場合又は低応力高サイクル疲労を受ける場合。 																							
<table><tr><td colspan="2">第52731号 恭</td><td colspan="2">06国補都構 常陸太田市新総合体育館新築工事</td></tr><tr><td colspan="2">第178097号 王交付番号 第6499号 寄 光一</td><td>S 建築工事</td><td>最終版 2024年12月</td></tr><tr><td colspan="2"></td><td>06 構造関係共通事項（鉄骨標準図 その1）</td><td></td></tr><tr><td colspan="2"></td><td>株式会社 柴建築設計事務所</td><td></td></tr></table>				第52731号 恭		06国補都構 常陸太田市新総合体育館新築工事		第178097号 王交付番号 第6499号 寄 光一		S 建築工事	最終版 2024年12月			06 構造関係共通事項（鉄骨標準図 その1）				株式会社 柴建築設計事務所					
第52731号 恭		06国補都構 常陸太田市新総合体育館新築工事																					
第178097号 王交付番号 第6499号 寄 光一		S 建築工事	最終版 2024年12月																				
		06 構造関係共通事項（鉄骨標準図 その1）																					
		株式会社 柴建築設計事務所																					

(7) 鋼材と溶接材料の組合せと溶接条件

鋼材の種類	規格	溶接材料	入熱 (kJ/cm)	バス間温度 (℃)
400N級炭素鋼 (STKR、BCR及びBCPを除く。)	JIS Z 3211	引張強さ570MPa以上のものを除く	40以下	350以下
	JIS Z 3312	YGW-11、 15	40以下	350以下
		YGW-18、 19	30以下	450以下
	JIS Z 3313	T490Tx-yCA-U	40以下	350以下
		T490Tx-yMA-U		
		T550Tx-yCA-U	30以下	450以下
		T550Tx-yMA-U		
490N級炭素鋼 (STKR及びBCPを除く。)	JIS Z 3214	引張強さ570MPa以上のものを除く	40以下	350以下
	JIS Z 3315	G49ADU-CCJ G49ADU-NCC、 NCCT等		
	JIS Z 3211	引張強さ570MPa以上のものを除く	40以下	350以下
	JIS Z 3312	YGW-11、 15	30以下	250以下
	JIS Z 3313	YGW-18、 19	40以下	350以下
		T490Tx-yCA-U	30以下	250以下
		T490Tx-yMA-U		
		T550Tx-yCA-U	40以下	350以下
		T550Tx-yMA-U		
520N級炭素鋼	JIS Z 3214	引張強さ570MPa以上のものを除く	40以下	350以下
	JIS Z 3315	G49ADU-CCJ G49ADU-NCC、 NCCT等		
JIS Z 3312	JIS Z 3312	YGW-18、 19	30以下	250以下
	JIS Z 3313	T550Tx-yCA-U T550Tx-yMA-U		
400N級炭素鋼 (STKR、BCR及びBCPIに限る。)	JIS Z 3312	YGW-11、 15	30以下	250以下
		YGW-18、 19	40以下	350以下
	JIS Z 3313	T490Tx-yCA-U T490Tx-yMA-U	30以下	250以下
JIS Z 3313	JIS Z 3313	T550Tx-yCA-U	40以下	350以下
		T550Tx-yMA-U		
	JIS Z 3312	YGW-18、 19	30以下	250以下
490N級炭素鋼 (STKR及びBCPIに限る。)	JIS Z 3313	T550Tx-yCA-U T550Tx-yMA-U		

1.5 重ねアーク溶接（フレア溶接）を行う場合の溶接長さ

鉄筋又は軽量形鋼に重ねアーク溶接（フレア溶接）を行う場合の溶接長さ（L）は、ビートの始点（La）及びクレーター（Lb）を除いた長さとする。

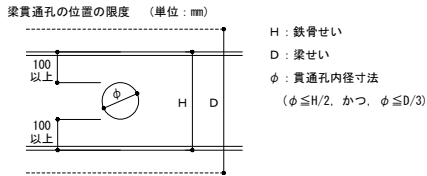
L：片面フレア溶接の場合 10d
両面フレア溶接の場合 5d

La及びLbは1d（軽量形鋼については1S）以上
d：異形鉄筋の呼び名に用いた数値
S：溶接のサイズ

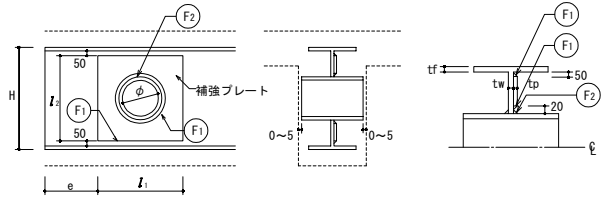


1.6 梁貫通孔補強

- (1) 鉄骨造及び鉄骨鉄筋コンクリート造の鉄骨梁ウェブ部材に貫通孔を設ける場合は、次による。
(ア) 貫通孔の内径寸法は、鉄骨せいの1/2以下かつ鉄筋コンクリートの梁せいの1/3以下とする。
(イ) 貫通孔間隔は、両側の貫通孔径の平均値の、鉄骨造で2倍以上、鉄骨鉄筋コンクリート造で3倍以上確保する。

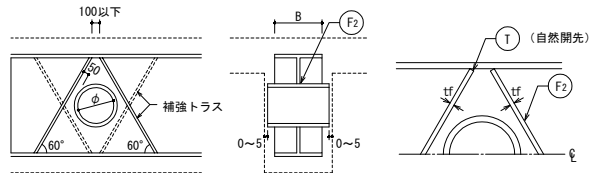


- (2) 貫通孔の補強方法は、構造図による。
補強プレート法及び補強トラス法の溶接等は、以下による。
補強プレート法
(ア) 補強プレートが16mm以上となる場合は、必要な長さの1/2以上の補強プレートをウェブ両面から溶接する。
(イ) 補強プレートは丸型としても良い。上下フランジとのあき50mmについては施工性を考慮して小さくすることもできる。



I_1 は3φ又は I_2 のうち小さい方とする。（ $e \geq H$ とする）
 e ：材端と補強プレートの間隔

補強トラス法
スリーブの取付けは、全周隅肉溶接とする。



- (3) 補強鋼管スリーブは下表を標準とする。

貫通孔φ	補強鋼管スリーブ (S T K 4 0 0)
1 0 0	φ-1 0 1、 6 × 3、 2
1 2 5	φ-1 3 9、 8 × 3、 6
1 5 0	φ-1 6 5、 2 × 4、 5
1 7 5	φ-1 9 0、 7 × 4、 5
2 0 0	φ-2 1 6、 3 × 4、 5
2 5 0	φ-2 6 7、 4 × 6、 0
3 0 0	φ-3 1 8、 5 × 7、 0
3 5 0	φ-3 5 5、 6 × 8、 0
4 0 0	φ-4 0 6、 4 × 9、 0
4 5 0	φ-4 5 7、 2 × 9、 0

- (4) 梁貫通補強は、監督員の承諾を得て既製品（一般評定品）を用いることができる。既製品による補強は、評定条件を満足する範囲内で行うこと。

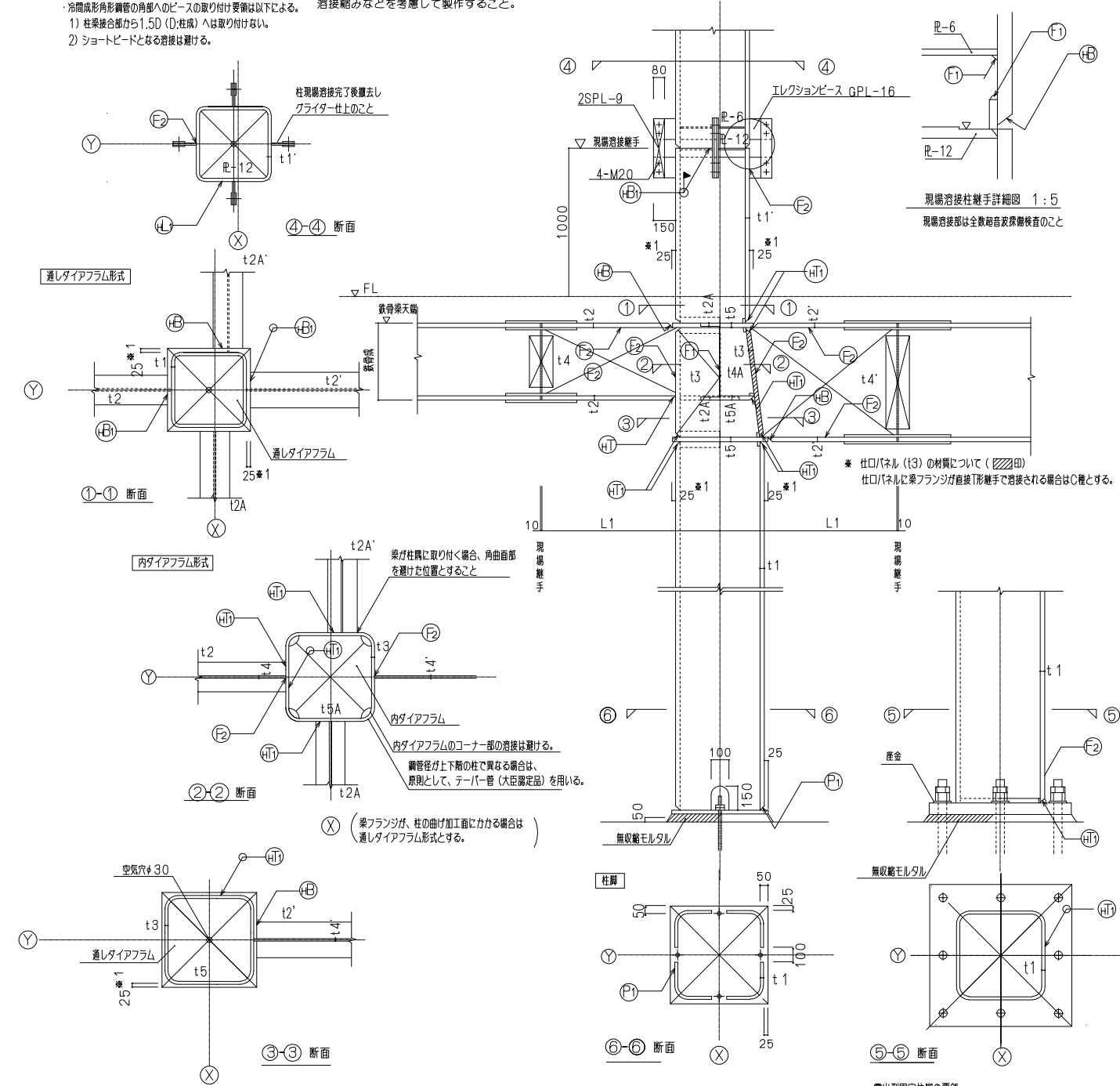
1.7 その他

- (1) 広幅平鋼の取扱い
BH材のフランジ及びフランジに使用する外側スプライスプレートは、PL表記であってもFB又はPLとする。
(2) フィラープレートの材質
フィラープレートを使用する場合、材質はSS400とする。
(3) もや、胴縁類の取付け用ボルト
もや、胴縁類の取付け用ボルトを普通ボルト結合とする場合は、二重ナットとする。

＜代表設計者＞ 一級建築士 大臣登録 第52731号 柴 恭 ＜構造設計者＞ 一級建築士 大臣登録 第178097号 構造設計一級建築士証交付番号 第6499号 酒寄 光一	06国補都構 常陸太田市新総合体育館新築工事		
	S	建築工事	最終版 2024年12月
	07	構造関係共通事項（鉄骨標準図 その2）	
		株式会社 柴建築設計事務所	

仕口部の溶接 1:20

- (注) ・仕口部にはスカラップを設けないことを原則とする。
・冷間成形角形鋼管の角部へのピースの取り付け変量は以下による。
1) 柱梁接合部から1.5D (D:柱径) へは取り付けない。
2) ショートピードとなる溶接は避ける。
- ・柱梁仕口部の成は取付く大梁成の公差およびダイヤフラムの歪折れ・溶接陥みなどを考慮して製作すること。



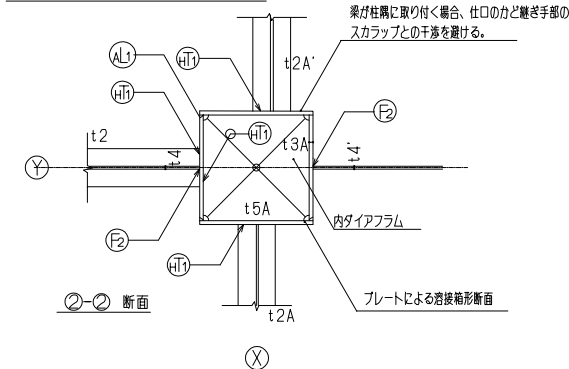
仕口部分 の 材質・板厚

ダイヤフラム材質・強度 材質はC種とする。ただし、内ダイヤフラムとなる場合はB種とする。強度は柱梁の鋼材のうち、最も高強度の材料と同じとする。
t5: 通しダイヤフラムに取り合う梁フランジ (t2, t2A, t2' t2A') のうち最大の板厚の2サイズ (6mm以上) アップとする。
t5A: 内ダイヤフラムに取り合う梁フランジ (t2, t2A, ...) のうち最大の板厚の2サイズ (6mm以上) アップとする。

仕口パネル部の材質・強度 上下の柱鋼管と同じB種とする。また、強度は高強度のものを用いる。
ただし、仕口パネルに設け梁のフランジが直接取り付く場合は、材質はC種とする。
t3: 上下の柱鋼管厚 (t1, t1') の厚い方とし、かつ、かつ等り合う梁のウェブ板厚 (t4, t4A, ...) 以上とする。
ただし、仕口パネルを4面プレート加工により製作する場合の板厚は以下による。
1) 柱鋼管がBCR材の場合は上下の柱鋼管厚 (t1, t1') の厚い方の1サイズ以上とする。
2) 柱鋼管がBCP材の場合は上下の柱鋼管厚 (t1, t1') の厚い方の2サイズ以上とする。

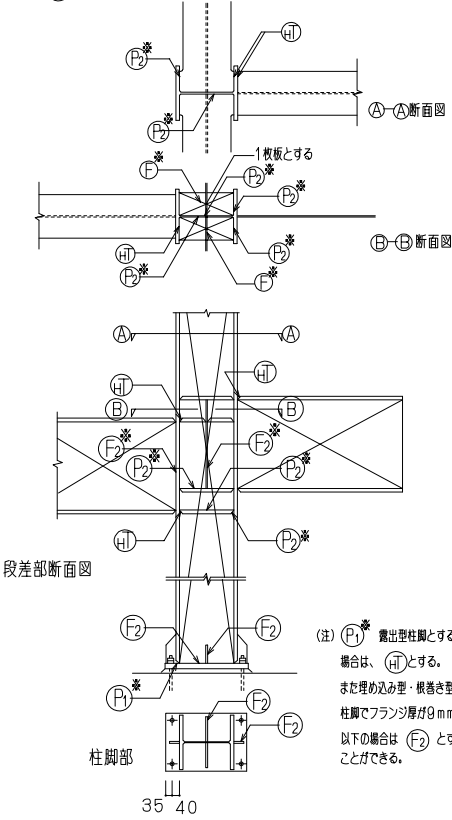
- (注) ※1. 通しダイヤフラムの出寸法は25mmを標準とし、角形鋼管厚が28mm以上の場合は30mmとする。
※2. 上下の柱鋼管径が異なる場合は原則として大臣認定取得したテーパ管 (大臣認定品) を用いること。
※3. ダイヤフラム、仕口パネル共に板厚が40mmを超える場合はTMCP鋼 (大臣認定品) を用いること。

仕口部をプレート溶接加工する場合



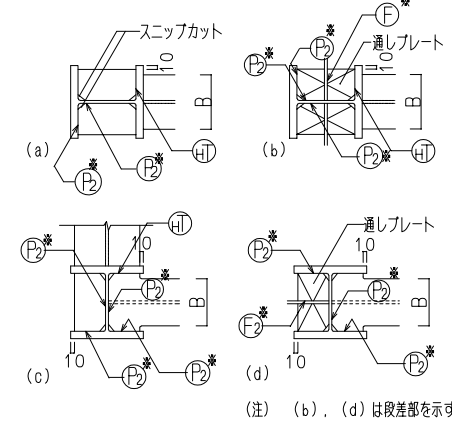
仕口部の溶接 (H形柱)

- (注) F2*: ウェブ厚が16mm以上のものについては F2とする
P2*: 水平スチフナ厚が12mm以下の場合は F2とする

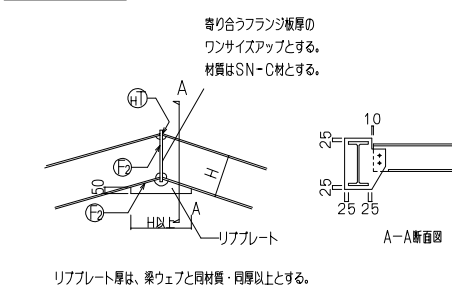


水平スチフナー

- ・仕口部に設ける水平スチフナーの形状および大きさは下記を標準とする。
梁フランジ材と同一のものとし、板厚は梁フランジ厚以上とする。



山形ラーメン種部分

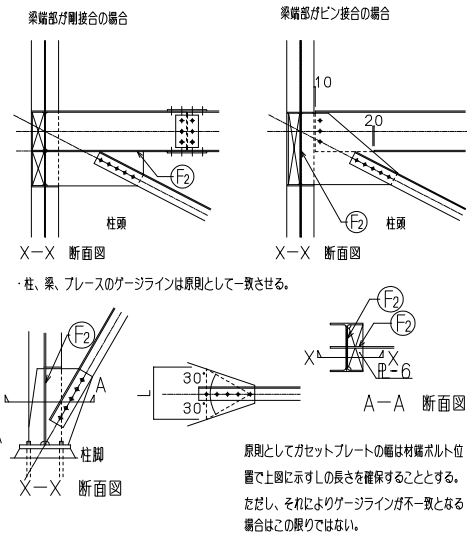


スニップカットの寸法: Sc

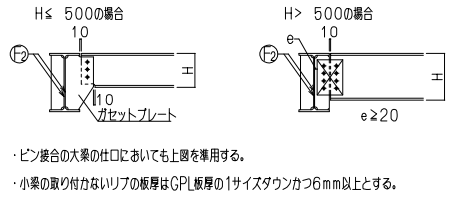
成形RH形鋼のスニップカット寸法は、Sc = r (フィレット部半径) + 2mmとする。
溶接BH形鋼のスニップカット寸法は下表による。

ウェブ板厚 tW	6	9	12	16以上
スニップカット Sc	10	12	14	15

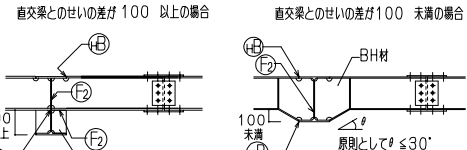
鉛直ブレース仕口



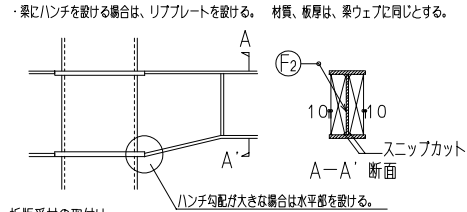
小梁仕口



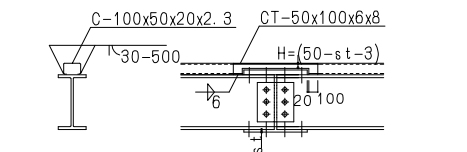
剛接小梁仕口



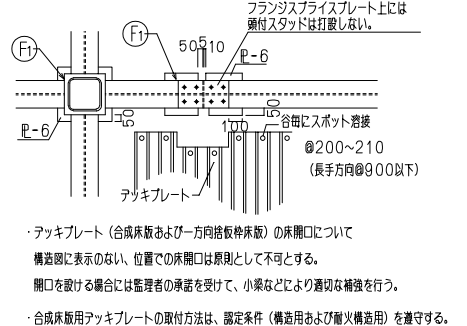
梁ハンチ要領



折板受材の取付け



タッキプレートの取付け

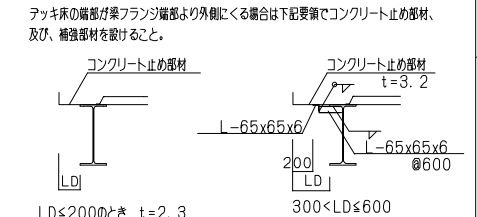


梁貫通孔の補強

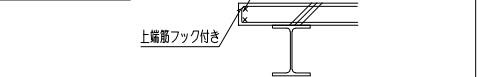
1. 梁貫通孔の限度
・梁貫通孔の内径寸法は、鉄骨成材の1/2以下とする。
- 梁貫通孔の位置及び大きさ
H: 鉄骨成
φ: 貫通孔内径寸法 (φ ≤ H/2)
- ・スリブピッチは、隣り合うスリブ平均の2倍以上とする。
・梁端に貫通孔を設ける場合は、原則として、梁端部から貫通孔の中心まで1.5H以上離し、かつ梁端手前のウェスブライスプレート端部より1.0H以上離すこと。
2. 梁貫通孔の補強要領
・梁貫通孔の補強方法は、補強プレート法とする。
・原則として、「1. 梁貫通孔の限度」以内にあるφ ≤ H/5かつφ ≤ 100の貫通孔は補強プレートは不要とする。
- (1) 補強プレートは、梁ウェブと同厚、同材質とし、補強プレートが16mm以上となるものについては、必要な厚さの1/2以上の補強プレートを、ウェブ両面から溶接する。
(2) L1は3φまたは、L2の小さい方とする。
(3) L2は3φまたは表示寸法のうち小さい方とする。
(4) 小梁がセットや補強プレート同士が干渉する場合は監理者の指示による。

(注) 梁貫通補強は上記のほか、監理者の承諾により既製品 (公認機関による性能保証取得品) を、用いることが出来る。

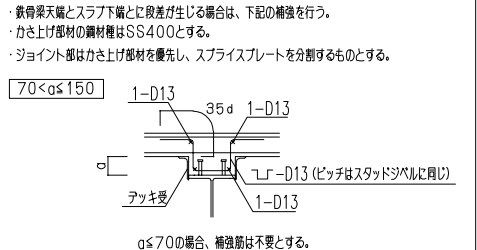
タッキ床端部コンクリート止めについて



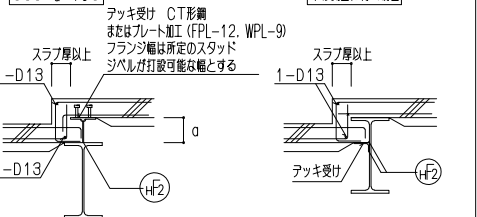
スラブの小口配筋要領



梁天端補強要領



梁の側面へ付く場合



溶接技能者の配置

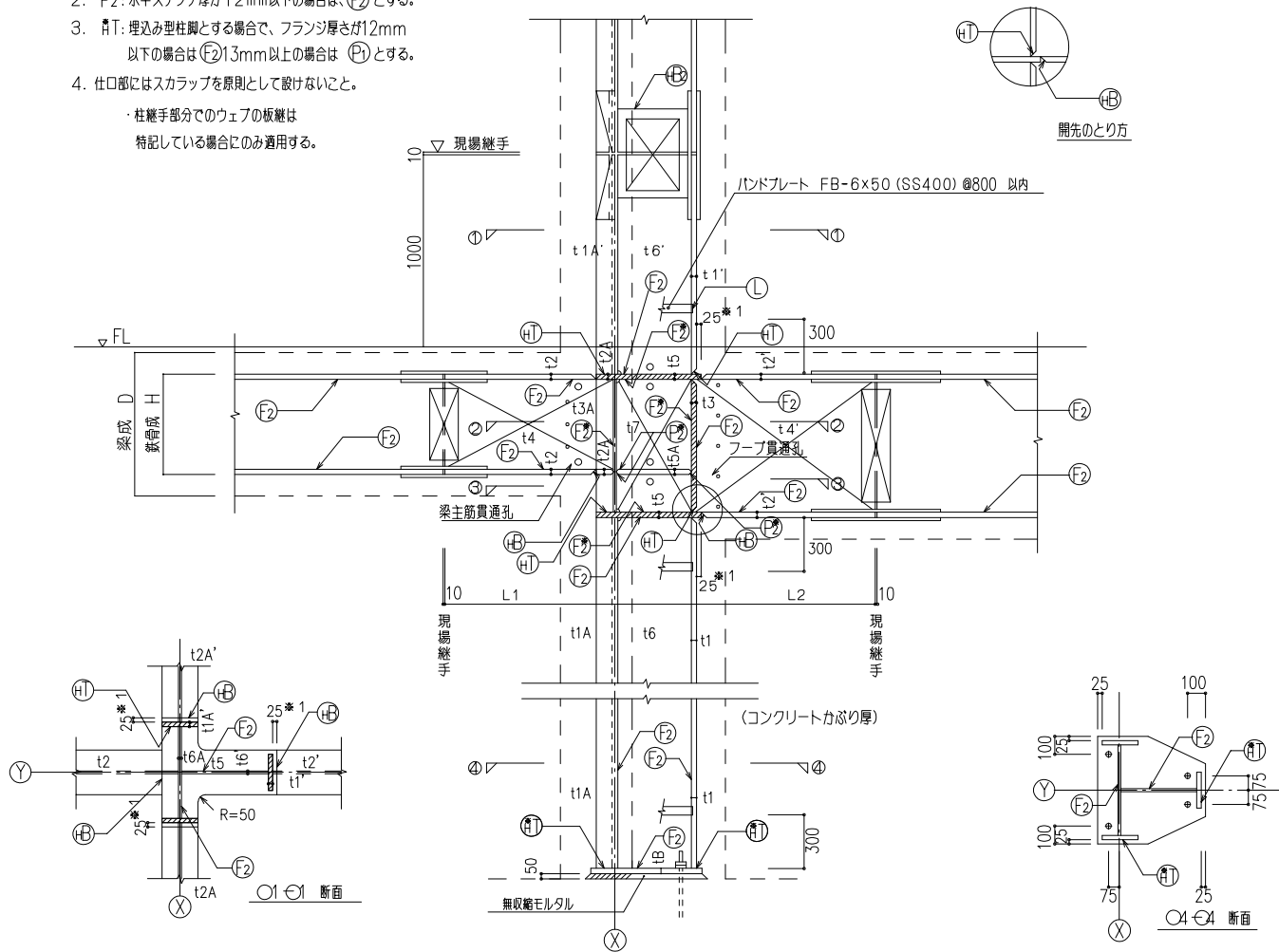
工場 (工事現場) 溶接技能者の資格	備考
原則として溶接技能者は「AW検定」の有資格者とする。	作業姿勢や代替タフ工法については、認定された範囲を有効とする。

「AW検定」とは、AW検定協会の実施する建築鉄骨溶接技能検定をいう。
有資格者が溶接作業に従事できない場合は、「AW検定」に準じた技量付加試験を実施する。

仕口部の溶接 1:50

- (注) 1. F: 仕口パネル厚が16mm以上の板厚については、 $\textcircled{F2}$ とする。
2. P: 水平スチフナ厚が12mm以下の場合は、 $\textcircled{F2}$ とする。
3. HT: 埋込み型柱脚とする場合で、フランジ厚さが12mm以下の場合は $\textcircled{F2}$ 13mm以上の場合は $\textcircled{P1}$ とする。
4. 仕口部にはスカラップを原則として設けないこと。

・柱継手部分でのウェブの板継は
特記している場合にのみ適用する。



図示なき場合：ベースプレート板厚（tB）は、寄り合う柱フランジ板厚（t1）の最大板厚とする。また材質は柱材と同材質とする。

仕口部の溶接 1:50

材質 SN490C（図中斜線印の通しタイアラムおよび仕口部すべての柱スキンプレート）
ただし寄り合う柱、梁が全てSN400Bの場合のみSN400Cとする。

材厚 t3: 上下柱フランジ板厚、板幅（t1、t1'）以上とする。
段違い梁フランジが、取り付く場合は、上記事項を満足し、かつ段違い梁フランジ板厚の2サイズダウン以上とする。

t5: タイアラムに取り合う梁フランジ板厚（t2、t2'、t2A、t2A'）のうち最大の板厚の2サイズ（6mm以上）アップで、かつt3、t3A以上とする。板厚が40mmを超える場合の鋼材種は特記による。但し、t5Aは取り合う梁フランジ板厚と同厚とする。

t7: 下表を満足し、かつ上下柱ウェブ板厚（t6、t6'）以上とする。
（取り付く梁ウェブt4、t4'のうち大きい方をt4Wとする。）

t4W	6	9	12	16
t7	9	12	16	19

(注) 直交方向のt7Aは上記の記号に右添字Aをつけて読み替えること。

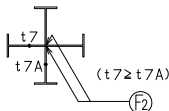
t7A: T型柱で段違い梁フランジ（t2）が取り付く場合は、上記に定めた板厚以上でかつ、t2の2サイズダウン以上とする。

仕口部の溶接 1:50

・仕口部において通しタイアラムを設ける位置は
原則として柱に集まる梁フランジの最も外側となる上下の梁フランジ位置とする。

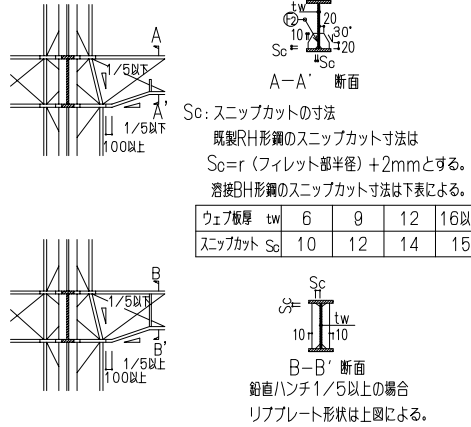
・T型柱のウェブは、板厚の大きい方を通しプレートとする。

(注) *1. タイアラムの出寸法は25mmを標準とし、柱フランジ板厚が28mm以上の場合は30mmとする。



梁ハンチ要領

・梁に鉛直ハンチを設ける場合は、下図に示すようなリブプレートを設置する。
リブプレートは梁ウェブと同厚・同材質とする。



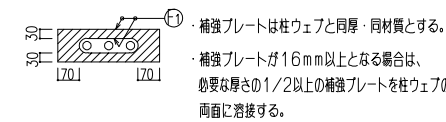
鉄筋貫通孔

・鉄筋貫通孔位置は、工作図作成の上、監督職員の承諾を得ること。

鉄筋径	D10	D13	D16	D19	D22	D25	D29	D32
孔径	21.0φ	24.0φ	28.0φ	31.0φ	35.0φ	38.0φ	43.0φ	46.0φ

埋込み柱脚ウェブの梁主筋貫通補強要領

・貫通鉄筋が水平に3個以上並ぶ場合、下記の補強をする。



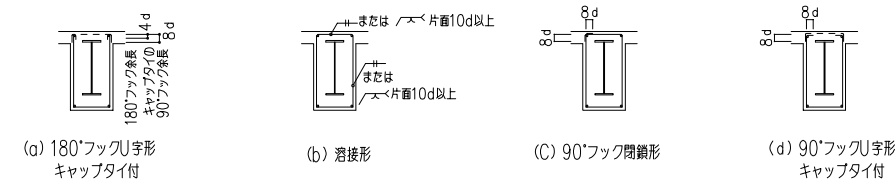
・補強プレートは柱ウェブと同厚・同材質とする。

・補強プレートが16mm以上となる場合は、
必要な厚さの1/2以上の補強プレートを柱ウェブの両面に溶接する。

(注) SRC造の配筋要領として「構造関係共通事項」以外に下図による。
「構造関係共通事項」と相違する場合、「構造関係共通事項」を優先するものとする。

1. 大梁のあはら筋

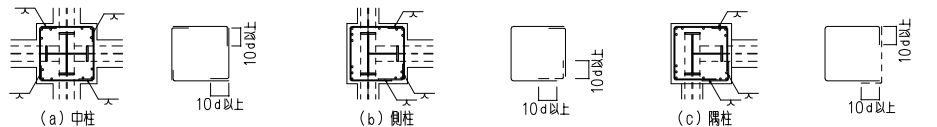
(1) 柱コンクリート面より梁成の2.0Dまでの範囲は (a) または (b) (2) 柱コンクリート面より梁成の2.0D以外の範囲は (c) または (d) によってもよい。



2. 柱梁接合部の帯筋

柱梁接合部の帯筋は割フープとして、片側10d以上のフレア溶接とする。

(注) 梁の取付かない側には原則として溶接継手箇所を設けないこと。



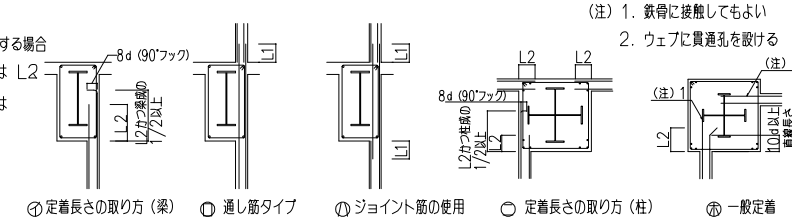
3. 壁筋の定着

(1) コンクリート断面に定着する場合

柱または梁内へ定着する場合は L2

壁内で重ね継手をする場合は

L1とする。



(2) 鉄骨に接合する場合

壁筋と鉄骨フランジとが干渉する場合

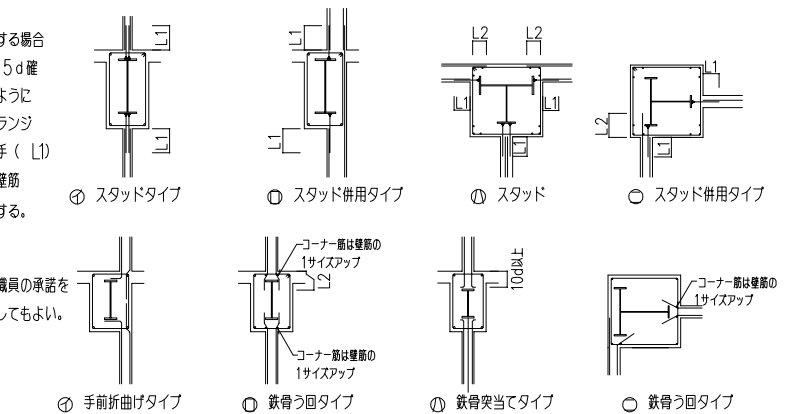
(壁筋の直線部分定着長さが15d確保できない場合は、右図のように

鉄筋工用スタッドを鉄骨フランジ

にスタッド溶接の上、重ね継手（L1）

とする。スタッドは干渉する壁筋

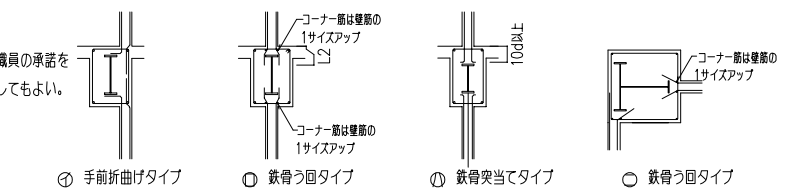
と同材種で同径・同じッチとする。



(3) その他

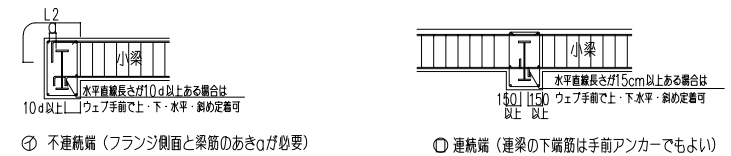
非耐力壁などにおいて、監督職員の承諾を

得た場合は右図の定着を採用してもよい。

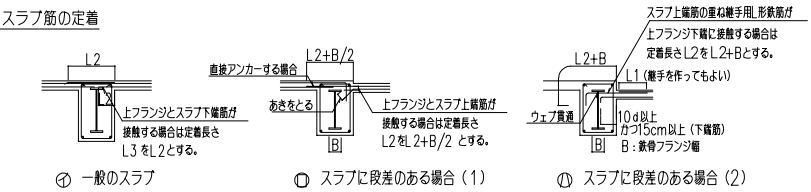


S-09図と相違する場合、S-09を優先するものとする。

4. 小梁筋の定着

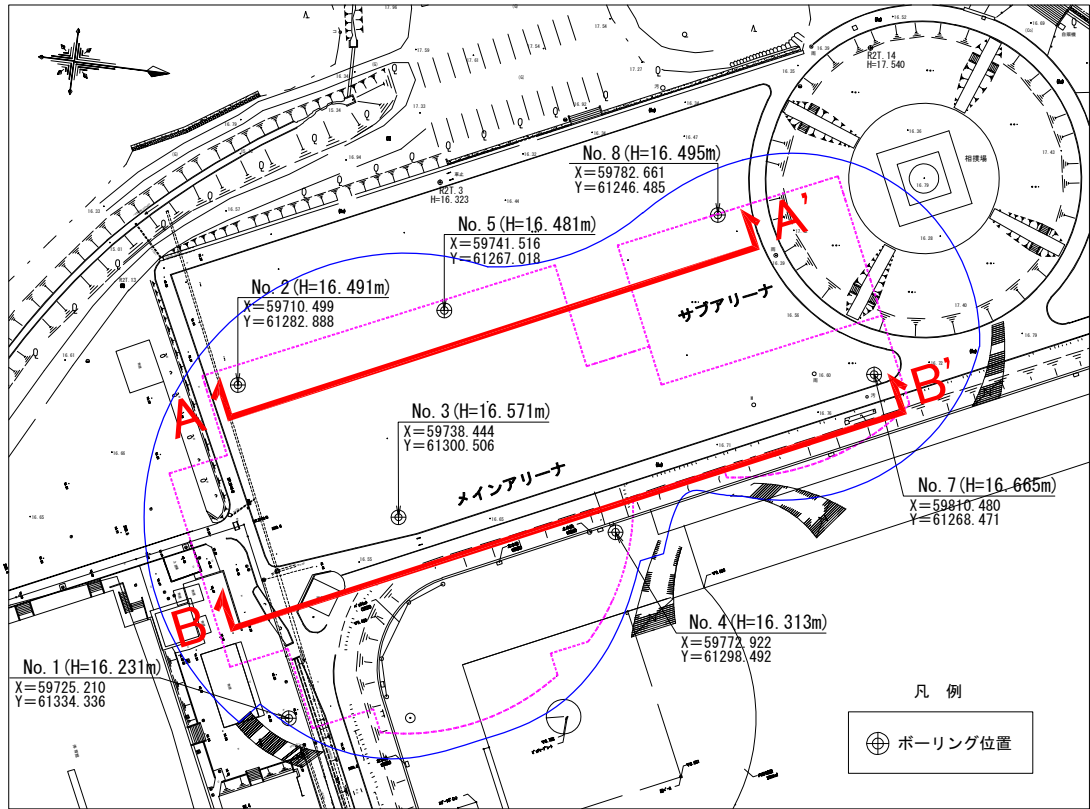


5. スラブラ筋の定着



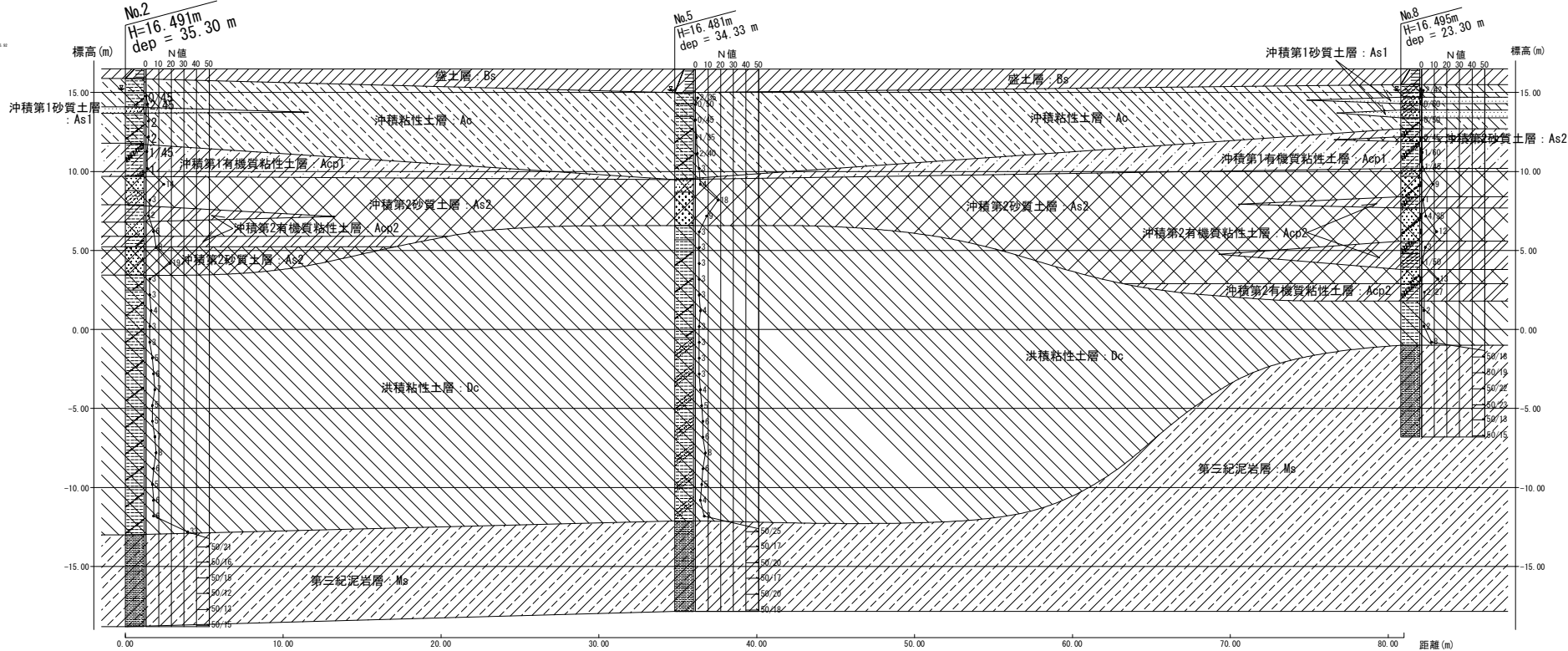
(注) スラブラ筋が鉄骨フランジと接触したり、コンクリート充てん性に懸念のある箇所で定着する場合は、
鉄筋の付着性能が劣るため、上記のように定着長さを変更すること。

＜代表設計者＞ 一級建築士 大臣登録 第52731号 柴 恭		06国補都構 常陸太田市新総合体育館新築工事	
S	建築工事	最終版	2024年12月
	09 鉄骨鉄筋コンクリート規準図		
＜構造設計者＞ 一級建築士 大臣登録 第178097号 構造設計一級建築士証交付番号 第6499号 酒寄 光一		株式会社 柴建築設計事務所	

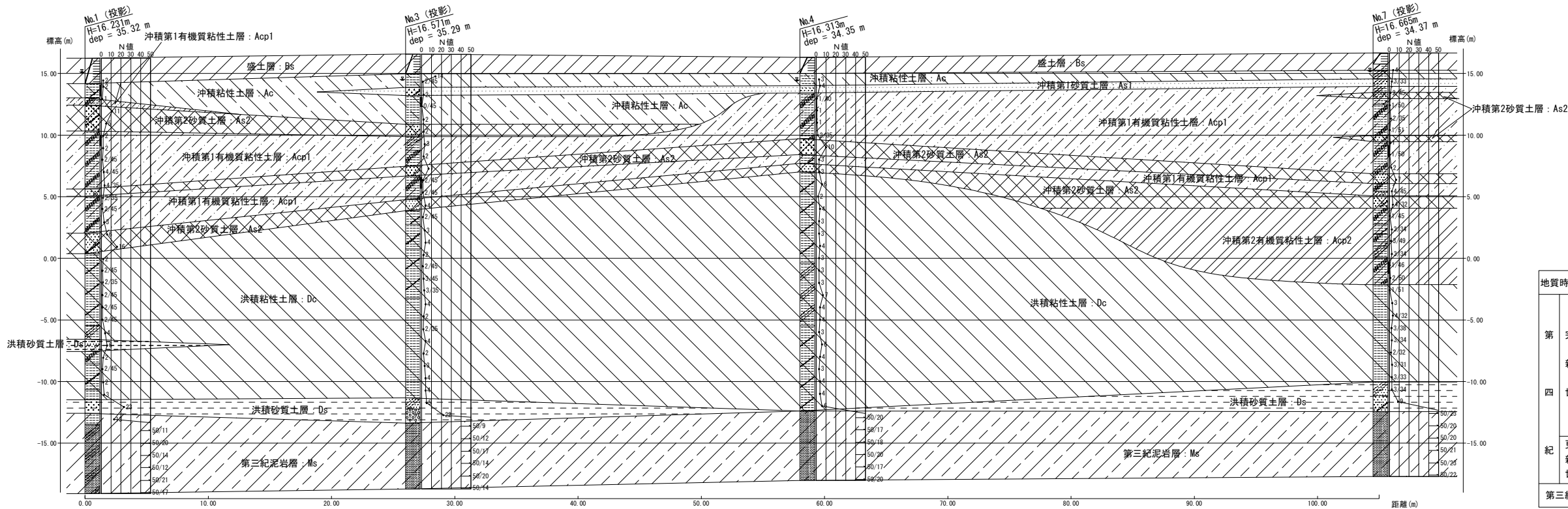


ボーリング位置図 1:600

A-A'断面



B-B'断面



地層区分凡例

地質時代	地 層 名	地層記号	層 厚 (m)	実測 N値 (単純平均値)
第四紀 更新世	盛土層	Bs	0.60~2.05	2~4 (3.0)
	沖積粘性土層	Ac	0.70~5.50	0~14 (2.0)
	沖積第1砂質土層	As1	0.40~0.90	3 (3.0)
	沖積第1有機質土層	Acp1	2.10~8.30	0~3 (1.6)
	沖積第2砂質土層	As2	2.00~5.10	1~19 (8.1)
	沖積第2有機質土層	Acp2	1.75~6.20	1~3 (1.8)
	洪積粘性土層	Dc	2.80~19.40	1~8 (3.7)
	洪積砂質土層	Ds	2.05~2.40	3~23 (11.3)
第三紀	第三紀泥岩層	Ms	5.27~6.52	13~167 (86.5)

※：第三紀泥岩層(Ms)のN値は換算値である。

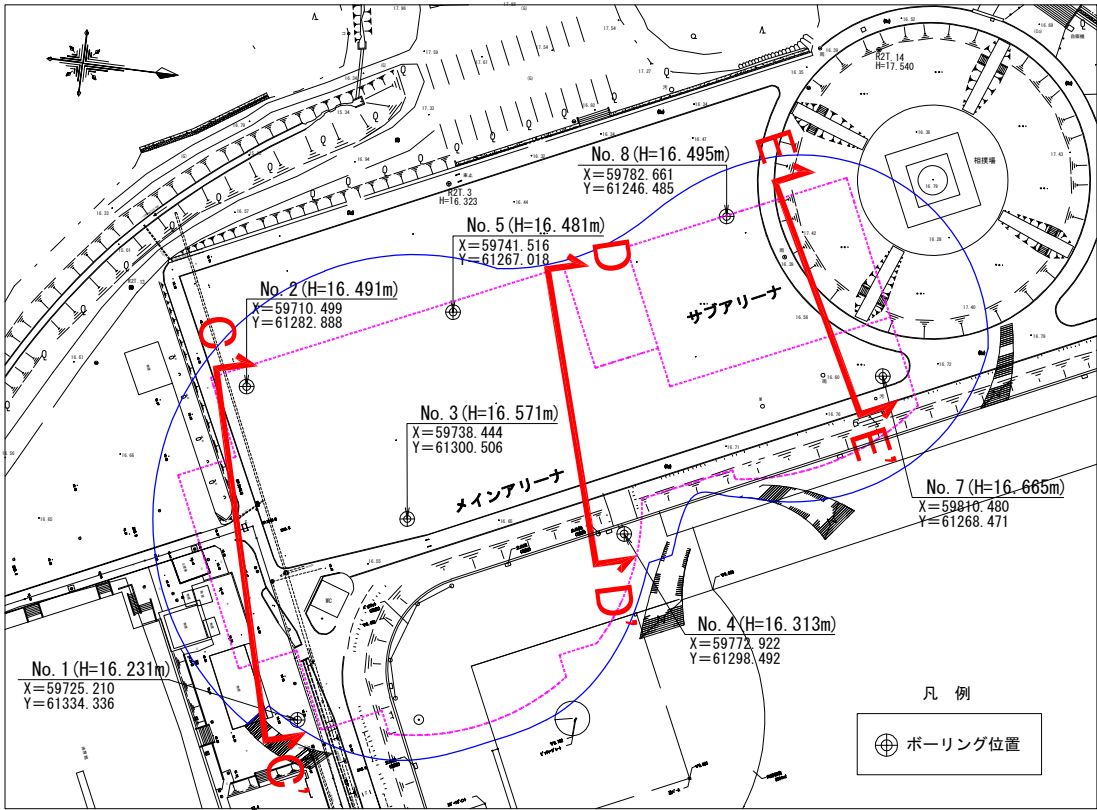
＜代表設計者＞
一級建築士 大臣登録 第52731号
柴 恭
＜構造設計者＞
一級建築士 大臣登録 第178097号
構造設計一級建築士証交付番号 第6499号
酒寄 光一

06国補都構 常陸太田市新総合体育館新築工事

S 建築工事 最終版 2024年12月

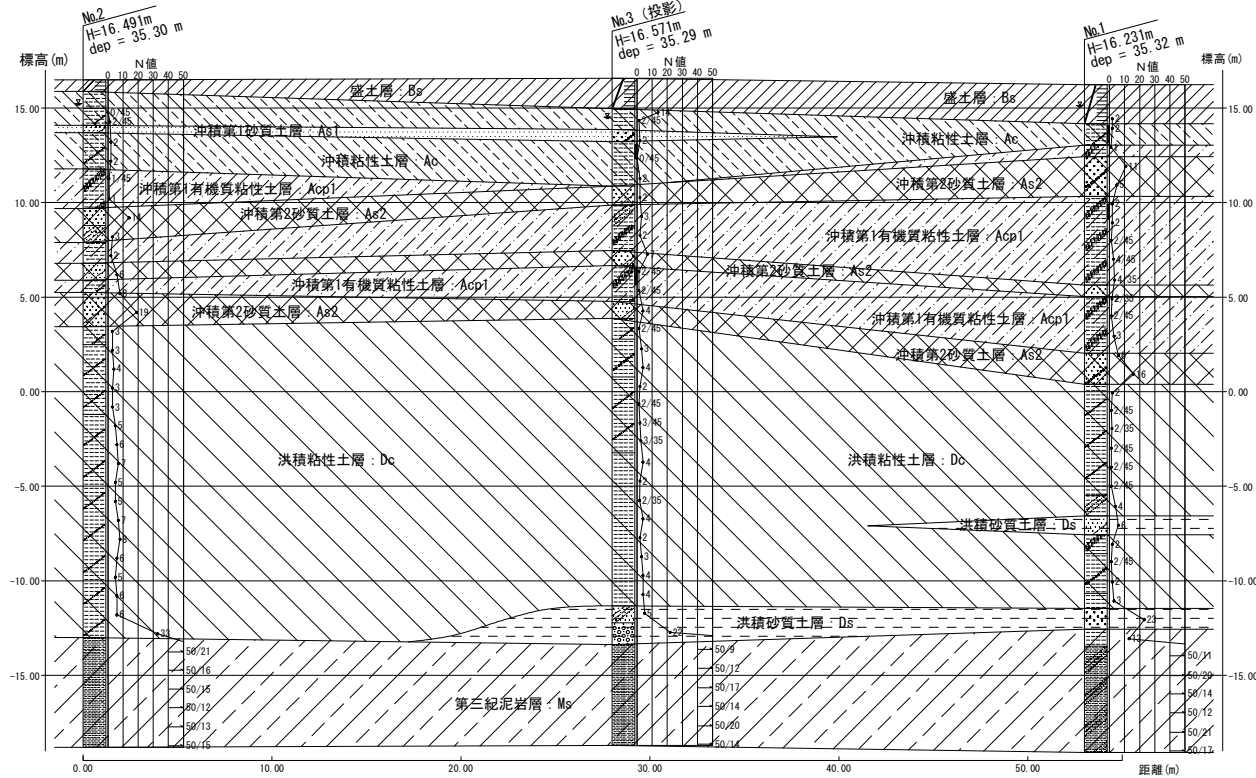
10 地層推定断面図 (1) S=1: 600(A1) S=1:1200(A2)

株式会社 柴建築設計事務所

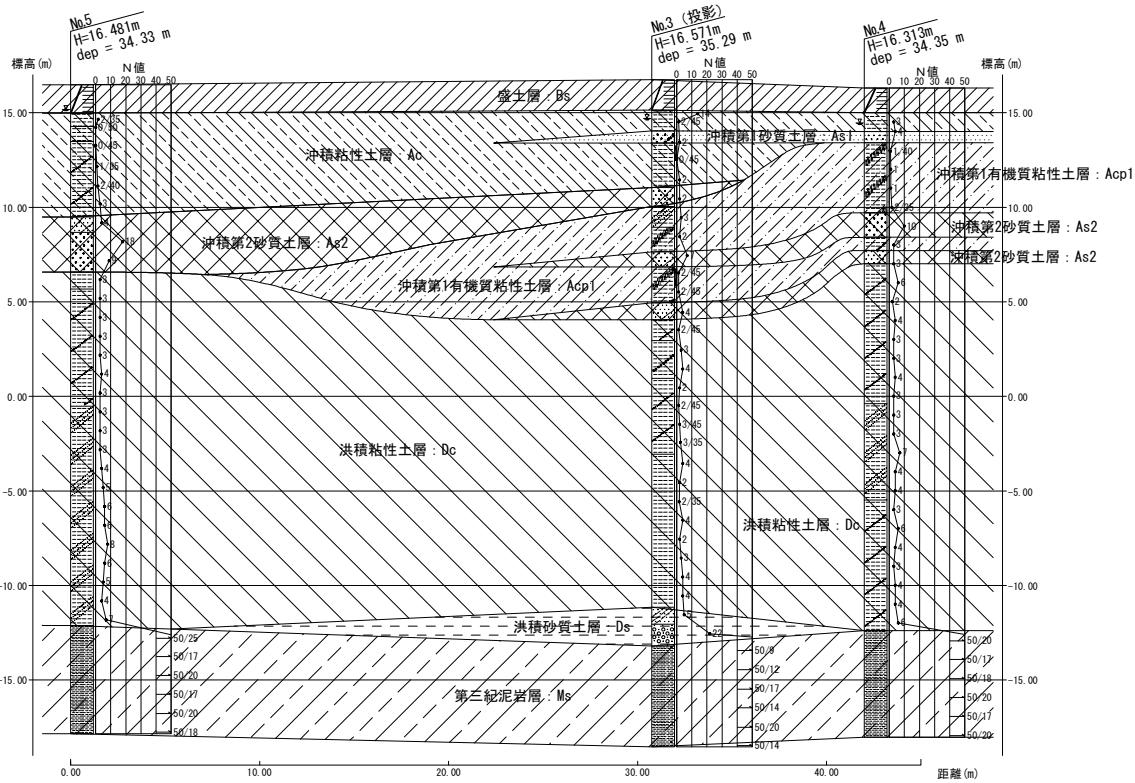


ボーリング位置図 1:600

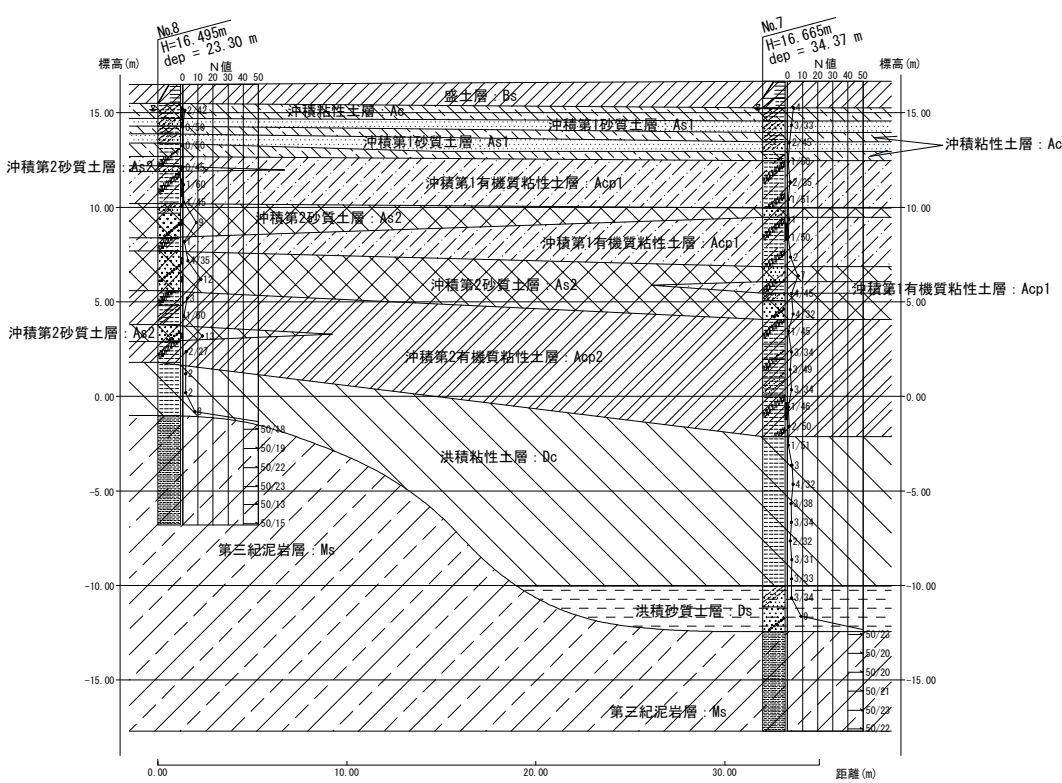
C-C' 断面



D-D' 断面



E-E' 断面



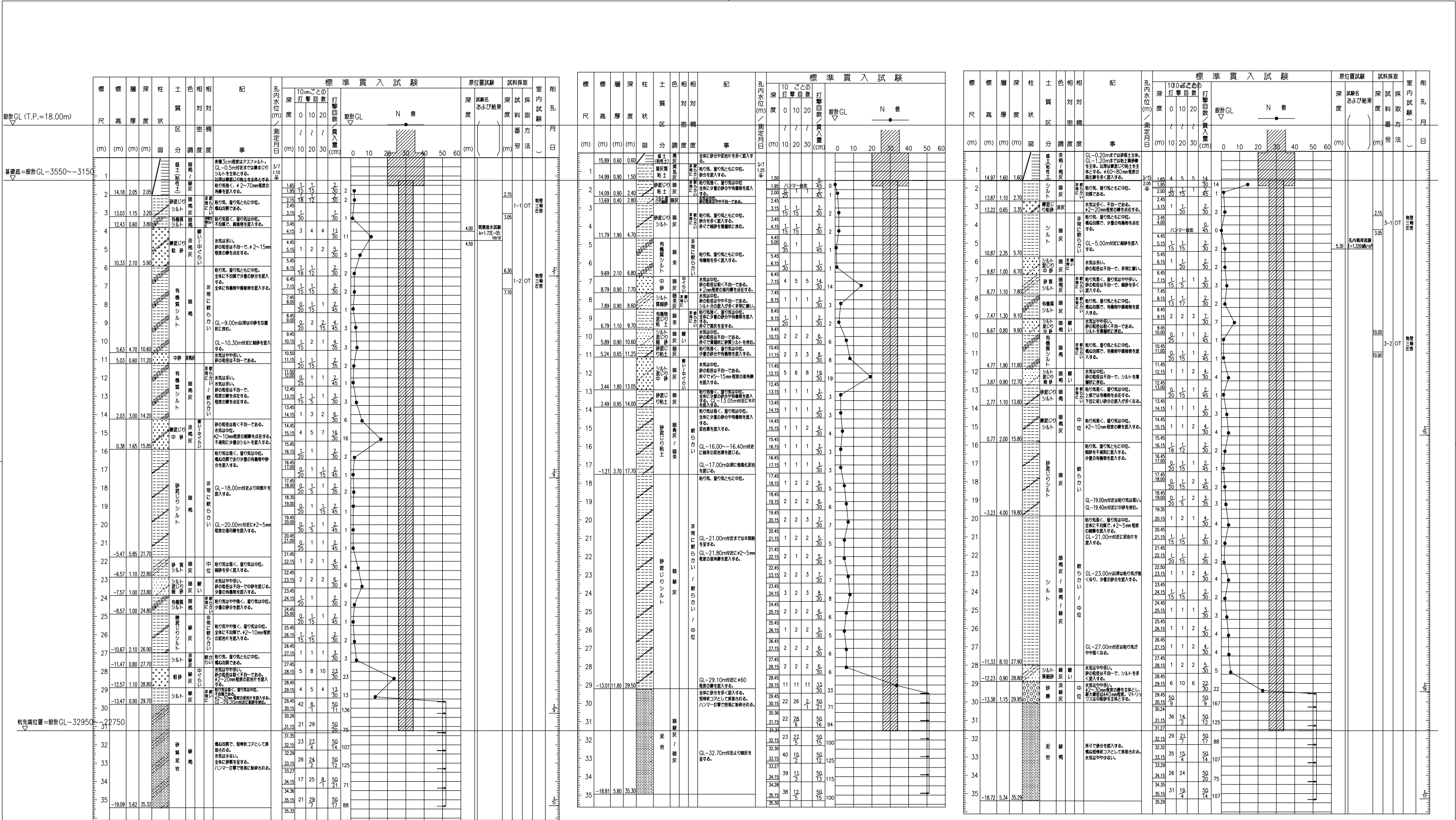
地層区分凡例

地質時代	地 層 名	地層記号	層 厚 (m)	実測 N値 (単純平均値)
第四紀	盛土層	Bs	0.60~2.05	2~4 (3.0)
	沖積粘性土層	Ac	0.70~5.50	0~14 (2.0)
	沖積第1砂質土層	As1	0.40~0.90	3 (3.0)
	沖積第1有機質土層	Acp1	2.10~8.30	0~3 (1.6)
	沖積第2砂質土層	As2	2.00~5.10	1~19 (8.1)
	沖積第2有機質土層	Acp2	1.75~6.20	1~3 (1.8)
	洪積粘性土層	Dc	2.80~19.40	1~8 (3.7)
更新世	洪積砂質土層	Ds	2.05~2.40	3~23 (11.3)
第三紀	第三紀泥岩層	Ms	5.27~6.52	13~167 (86.5)

※ 第三紀泥岩層(Ms)のN値は換算値である。

＜代表設計者＞
一級建築士 大臣登録 第52731号
柴 恭
＜構造設計者＞
一級建築士 大臣登録 第178097号
構造設計一級建築士証交付番号 第6499号
酒寄 光一

06国補都構 常陸太田市新総合体育館新築工事			
S	建築工事		最終版 2024年12月
11	地層推定断面図 (2)	S=1: 600(A1) S=1:1200(A3)	
株式会社 柴建築設計事務所			

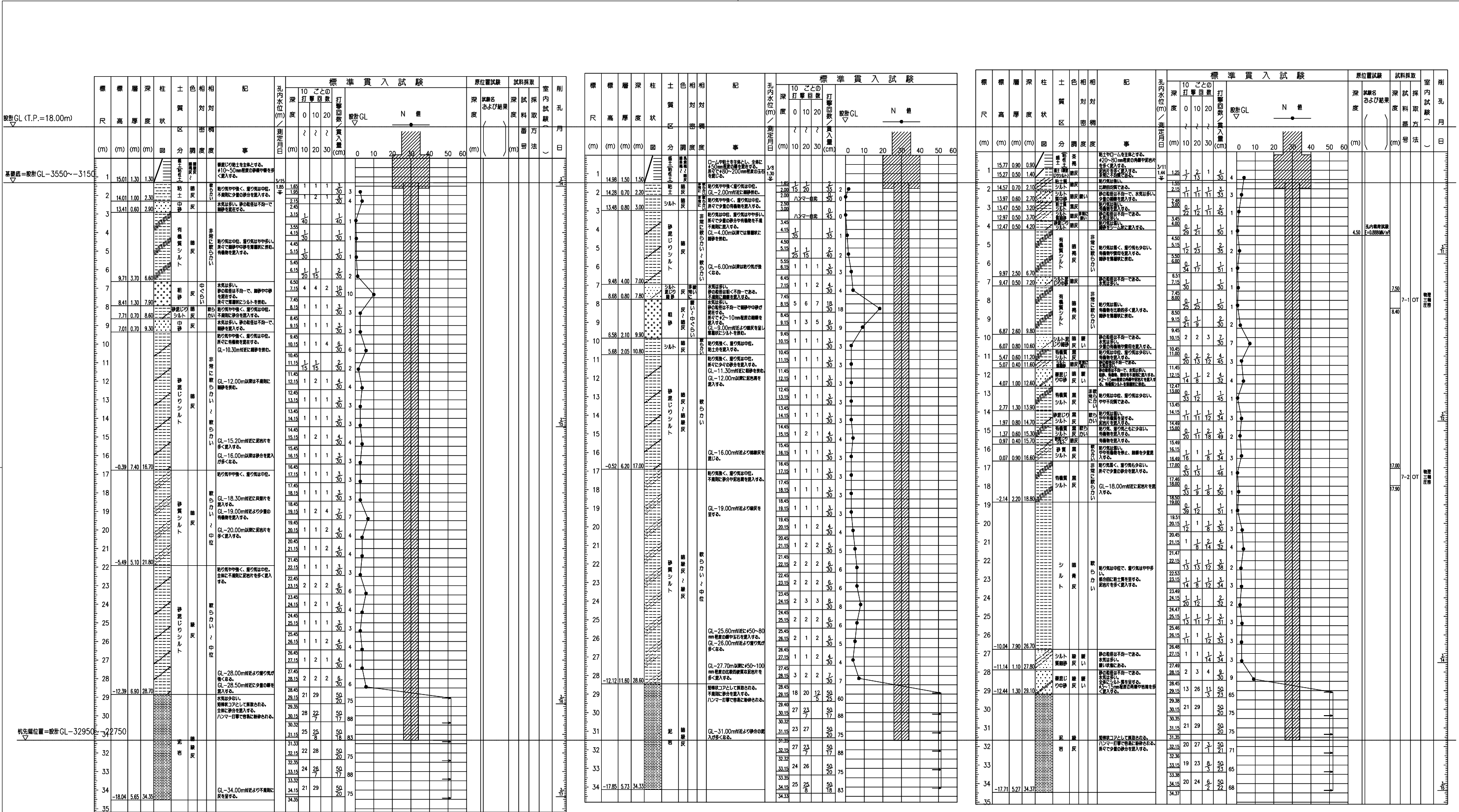


ボーリング柱状図 No.1 1:100
孔口標高 T.P.=16.231m

ボーリング柱状図 No.2 1:100
孔口標高 T.P.=16.491m

ボーリング柱状図 No.3 1:100
孔口標高 T.P.=16.571m

＜代表設計者＞ 一級建築士 大臣登録 第52731号 柴 恭		06国補都構 常陸太田市新総合体育館新築工事	
＜構造設計者＞ 一級建築士 大臣登録 第178097号 構造設計一級建築士証交付番号 第6499号 酒寄 光一	S	建築工事	最終版 2024年12月
	12	ボーリング柱状図 (1)	1:100 (A1) 1:200 (A3)
		株式会社 柴建築設計事務所	



ボーリング柱状図 No.4 1:100

孔口標高 T.P.=16.313m

ボーリング柱状図 No.5 1:100

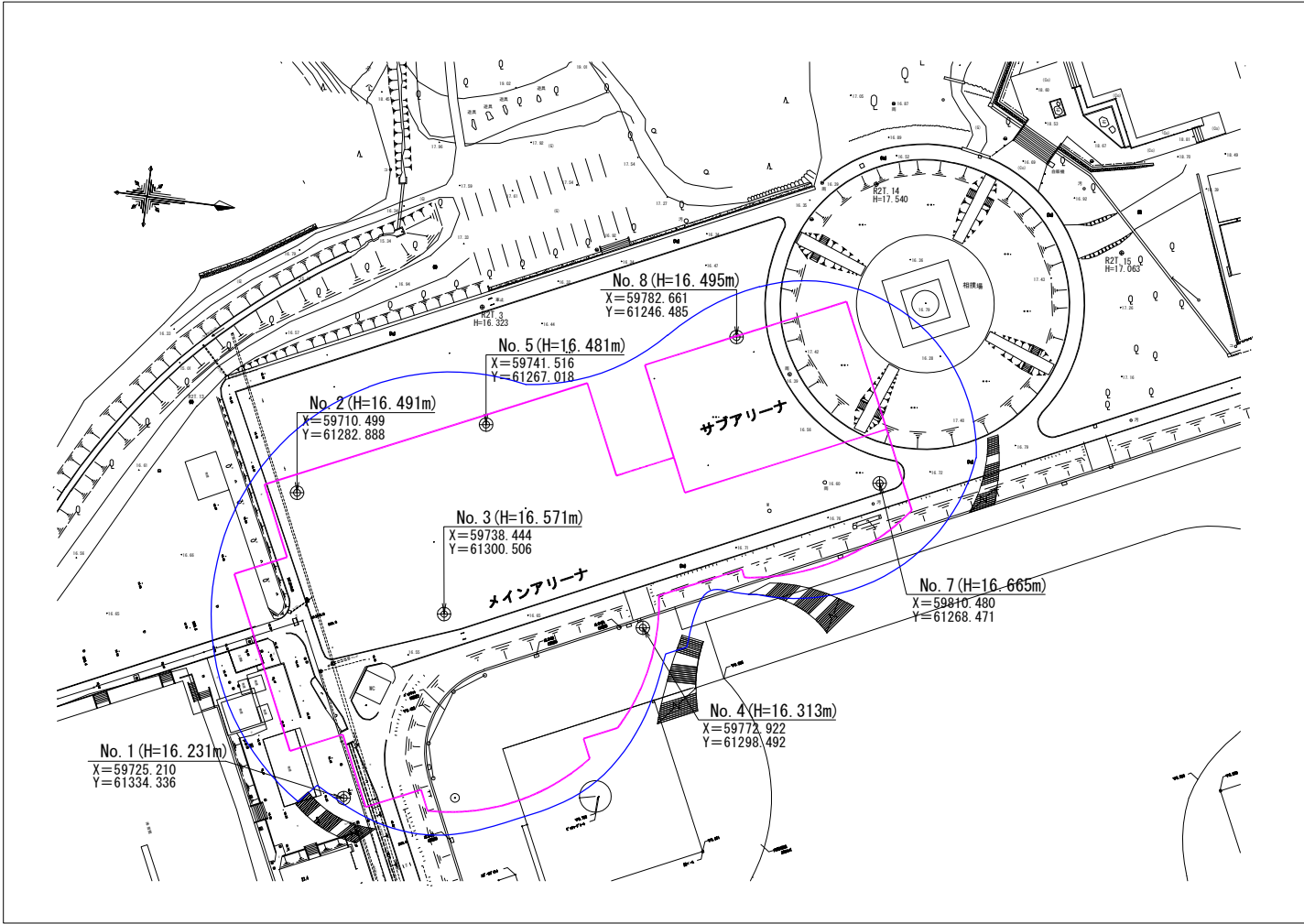
孔口標高 T.P.=16.481m

ボーリング柱状図 No.7 1:100

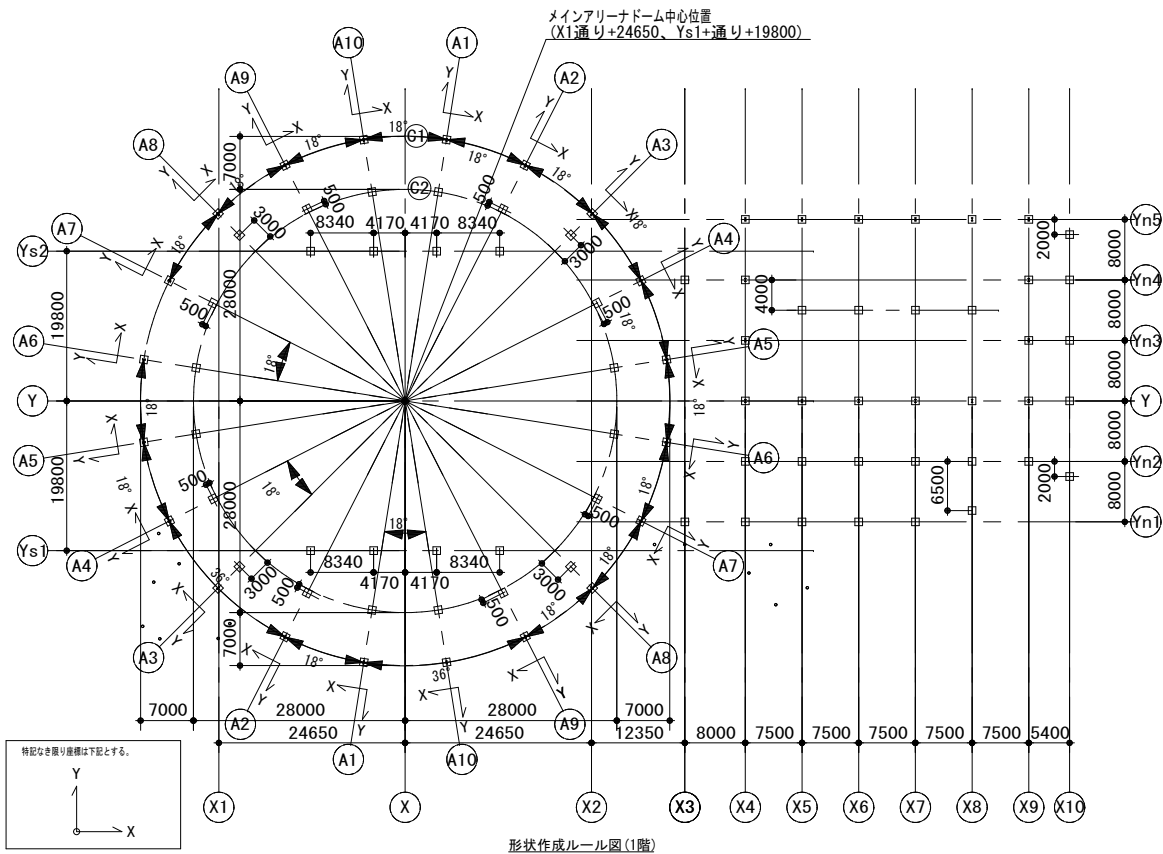
孔口標高 T.P.=16.665m

標 尺	標 高	層 厚	深 度	柱 状	土 質	色 相	相 対	記 号	孔 内 水 位 (m) ／ 測定日	標準貫入試験										原位置試験 深度 (m)	試験名 および結果	深 度 (m)	試料採取 番号	採取 方法	削 孔 月 日																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																											
										観音GL																N 値																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																										
										観音GL																	N 値																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																									
										観音GL																		N 値																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																								
(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(

ボーリング柱状図 No.8 1:100
孔口標高 T.P.=16.495m



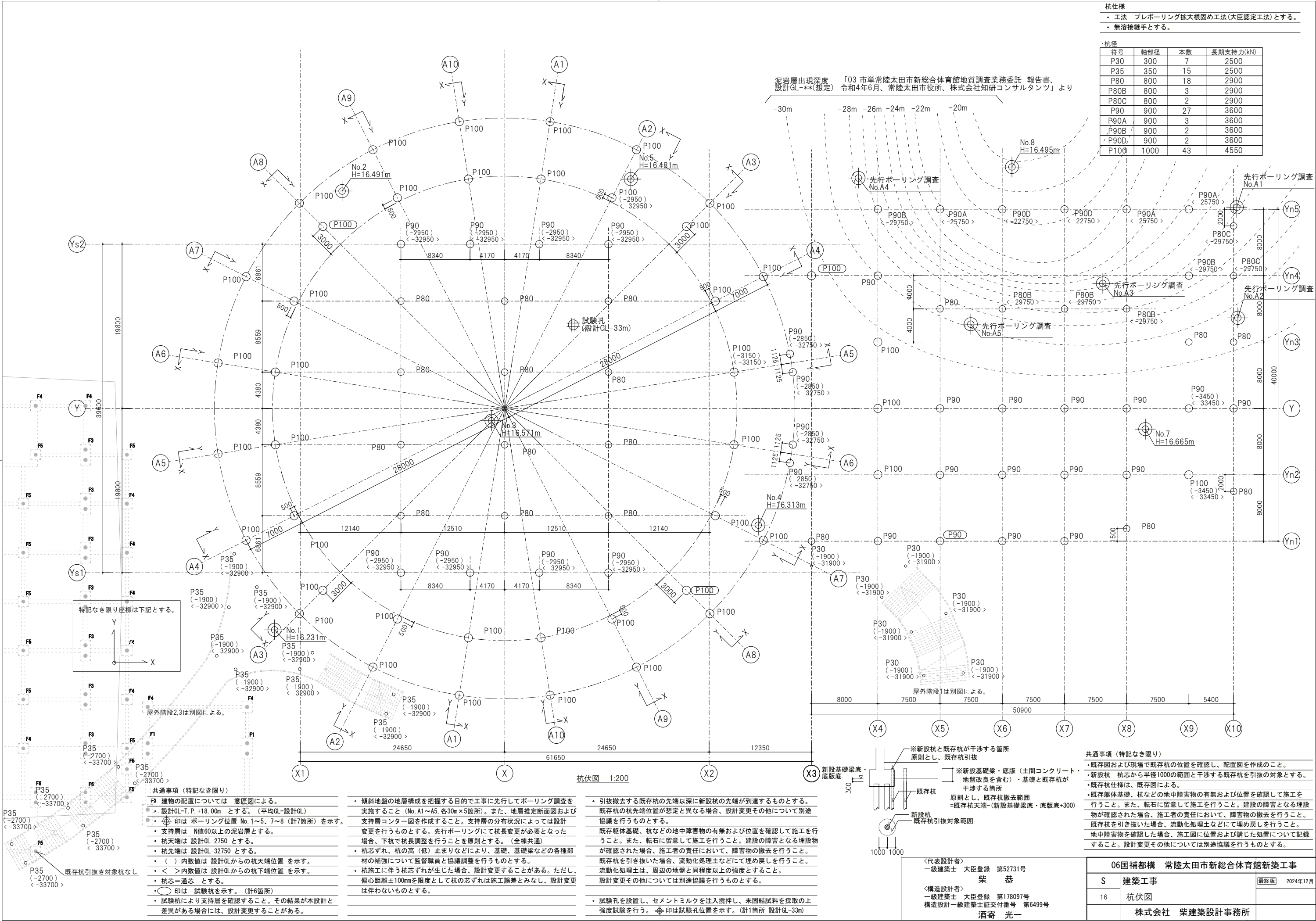
代表設計者		06国補都構 常陸太田市新総合体育館新築工事	
一級建築士 大臣登録 第52731号	柴 恭	S 建築工事	最終版 2024年12月
一級建築士 大臣登録 第178097号	酒 寄 光一	14 ボーリング柱状図 (3)	1:100 (A1) 1:200 (A3)
構造設計一級建築士証交付番号 第6499号		株式会社 柴建築設計事務所	

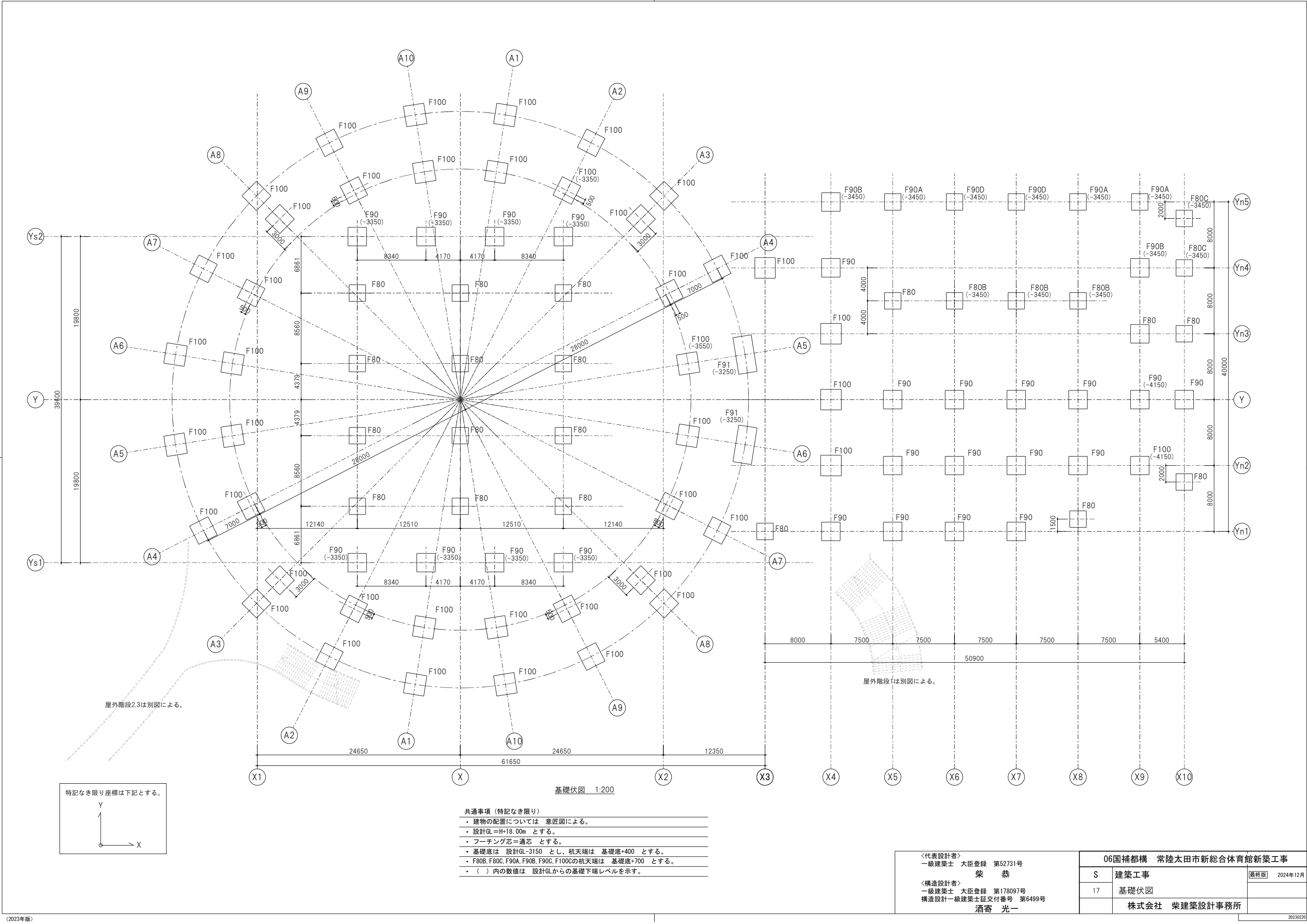


〈代表設計者〉 一級建築士 大臣登録 第52731号 柴 恭 〈構造設計者〉 一級建築士 大臣登録 第178097号 構造設計一級建築士証交付番号 第6499号 酒寄 光一	06国補都構 常陸太田市新総合体育館新築工事	
	S	建築工事
	15	形状作成ルール図(1)
株式会社 柴建築設計事務所		最終版 2024年12月



<代表設計者> 一級建築士 大臣登録 第52731号 柴 恭		06国補都構 常陸太田市新総合体育館新築工事		最終版 2024年12月	
<構造設計者> 一級建築士 大臣登録 第178097号 構造設計一級建築士証交付番号 第6499号 酒崎 光一		S	建築工事	S=1:200 (A1) S=1:400 (A3)	
		15-1	形状作成ルール図(2)		
		株式会社 柴建築設計事務所			





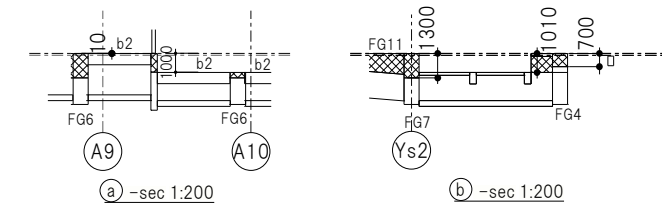
特記なき限り座標は下記とする。

Y
↑
X
→

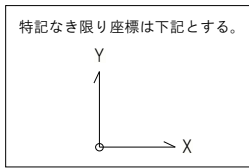
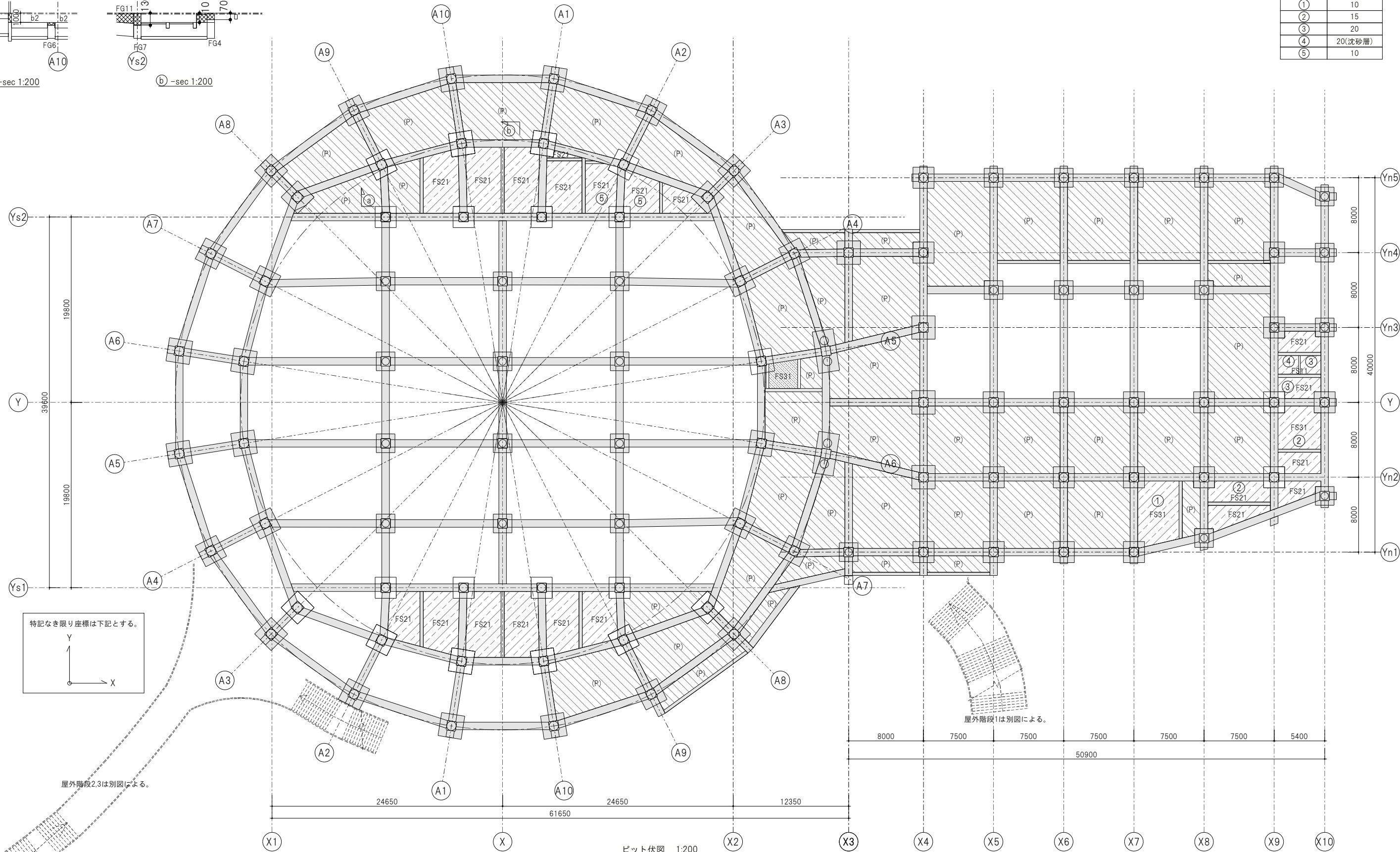
- 共通事項（特記なき限り）
- ・ 建物の配置については 意匠図による。
 - ・ 設計GL=H+18.00m とする。
 - ・ フーチング芯=通芯 とする。
 - ・ 基礎底は 設計GL-3150 とし、杭天端は 基礎底+400 とする。
 - ・ F80B, F80C, F90A, F90B, F90C, F100Cの杭天端は 基礎底+700 とする。
 - ・ () 内の数値は 設計GLからの基礎下端レベルを示す。

〈代表設計者〉
一級建築士 大臣登録 第52731号
柴 恭
〈構造設計者〉
一級建築士 大臣登録 第178097号
構造設計一級建築士証交付番号 第6499号
酒寄 光一

06国補都構 常陸太田市新総合体育館新築工事			
S	建築工事	最終版	2024年12月
17	基礎伏図		
	株式会社 柴建築設計事務所		



水槽重量	
水槽番号	重量(kN/㎡)
①	10
②	15
③	20
④	20(沈砂層)
⑤	10



屋外階段2,3は別図による。

屋外階段1は別図による。

ピット伏図 1:200

共通事項（特記なき限り）

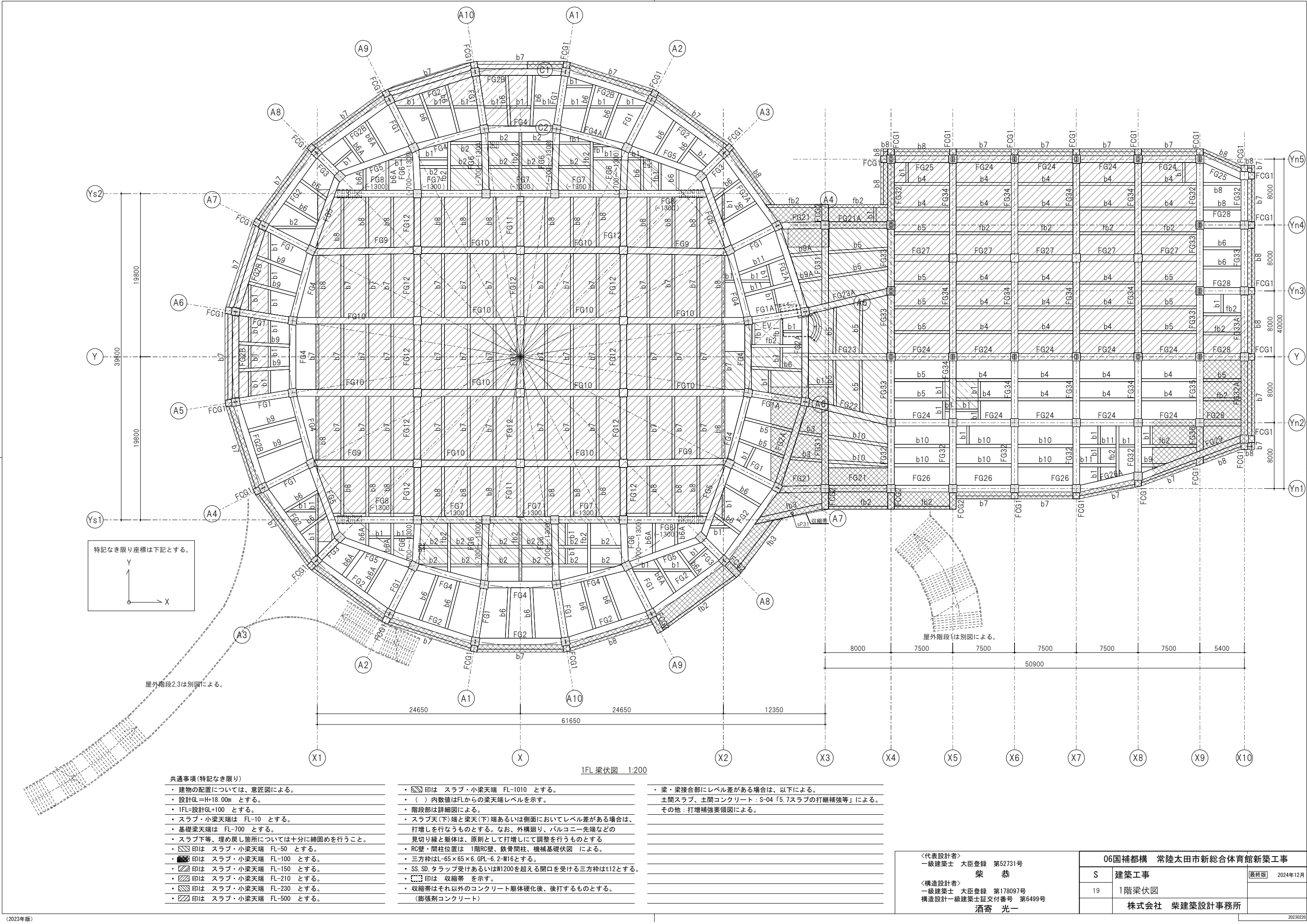
- 建物の配置については、意匠図による。
- 設計GL=H+18.00m とする。
- 1FL=設計GL+100 とする。
- (P) は砕石ピットを示す。
- 砕石ピット天端は 1FL-2400 とする。
- 印は スラブ天端 1FL-2400 とする。
- 印は スラブ天端 1FL-2400とし、1FL-1850まで打増し(D13@200タテヨコ)を行うものとする。

- 原則埋め戻しとする。
- スラブ下等、埋め戻し箇所については十分に締固めを行うこと。
- 各種マス・人通孔・釜場・連通管・マンホール・設備機器置場トレンチなどの配置および仕様は意匠図による。
- ピット床勾配は意匠図による。
- スラブ天（下）端と梁天（下）端にレベル差がある場合は、梁天（下）端を打増しとする。

＜代表設計者＞
一級建築士 大臣登録 第52731号
柴 恭
＜構造設計者＞
一級建築士 大臣登録 第178097号
構造設計一級建築士証交付番号 第6499号
酒寄 光一

06国補都構 常陸太田市新総合体育館新築工事

S	建築工事	最終版	2024年12月
18	ピット伏図		
	株式会社 柴建築設計事務所		



共通事項(特記なき限り)

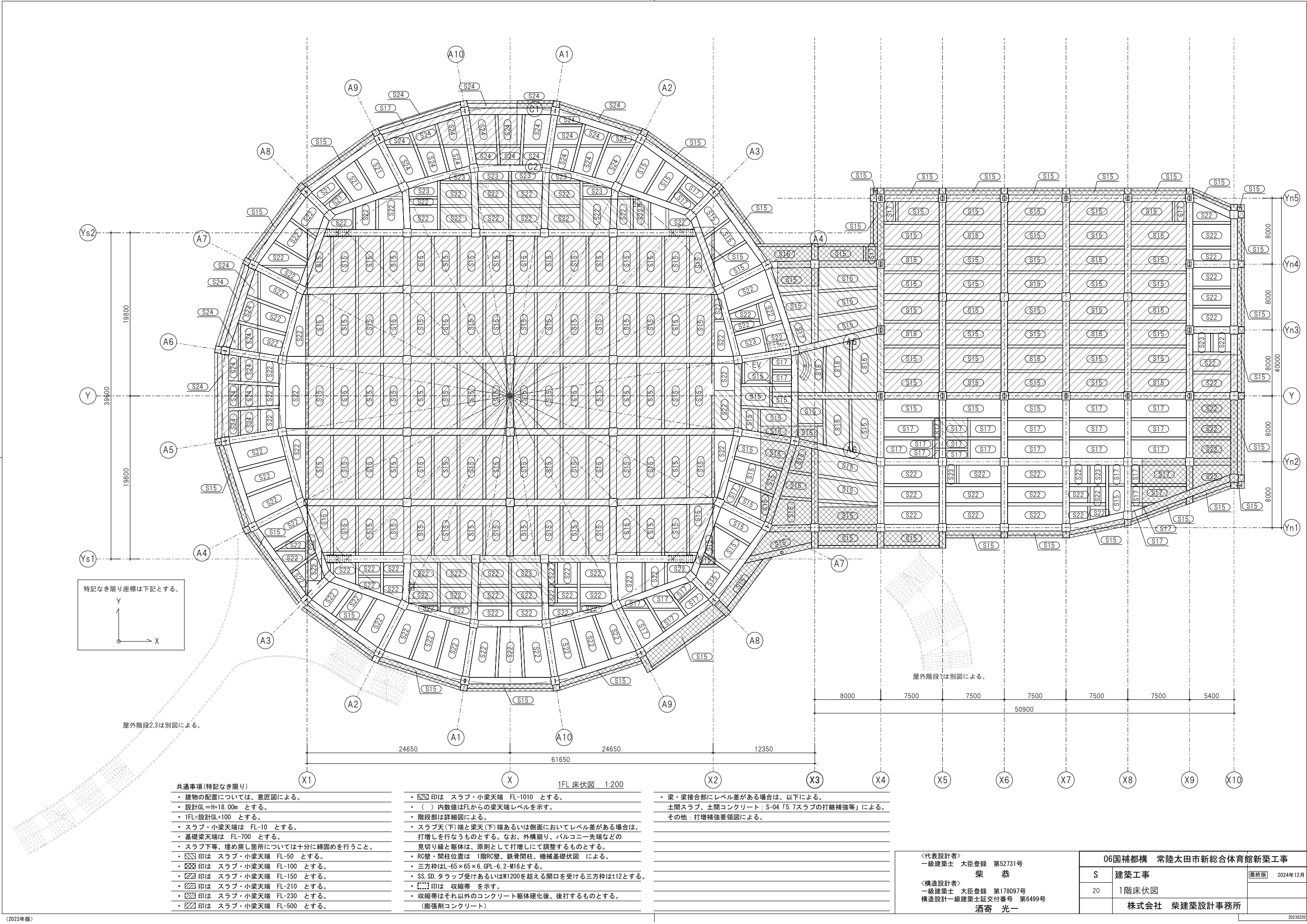
- ・建物の配置については、意匠図による。
- ・設計GL=H+18.00m とする。
- ・1FL=設計GL+100 とする。
- ・スラブ・小梁天端は FL-10 とする。
- ・基礎梁天端は FL-700 とする。
- ・スラブ下等、埋め戻し箇所については十分に締固めを行うこと。
- ・印は スラブ・小梁天端 FL-50 とする。
- ・印は スラブ・小梁天端 FL-100 とする。
- ・印は スラブ・小梁天端 FL-150 とする。
- ・印は スラブ・小梁天端 FL-210 とする。
- ・印は スラブ・小梁天端 FL-230 とする。
- ・印は スラブ・小梁天端 FL-500 とする。

- ・印は スラブ・小梁天端 FL-1010 とする。
- ・() 内数値はFLからの梁天端レベルを示す。
- ・階段部は詳細図による。
- ・スラブ天(下)端と梁天(下)端あるいは側面においてレベル差がある場合は、打増しを行なうものとする。なお、外構廻り、バルコニー先端などの見切り縁と躯体は、原則として打増しにて調整を行うものとする。
- ・RC壁・間柱位置は 1階RC壁、鉄骨間柱、機械基礎伏図 による。
- ・三方枠はL-65×65×6、GPL-6、2-M16とする。
- ・SS, SD, タラップ受けあるいはW1200を超える開口を受ける三方枠はt12とする。
- ・印は 収縮帯 を示す。
- ・収縮帯はそれ以外のコンクリート躯体硬化後、後打するものとする。(膨張剤コンクリート)

- ・梁・梁接合部にレベル差がある場合は、以下による。
- 土間スラブ、土間コンクリート：S-04「5.7スラブの打継補強等」による。
- その他：打増補強要領図による。

<代表設計者>
一級建築士 大臣登録 第52731号
柴 恭
<構造設計者>
一級建築士 大臣登録 第178097号
構造設計一級建築士証交付番号 第6499号
酒寄 光一

06国補都構 常陸太田市新総合体育館新築工事			
S	建築工事	最終版	2024年12月
19	1階梁伏図		
株式会社 柴建築設計事務所			



共通事項(特記なき限り)

- 建物の配置については、意匠図による。
- 設計GL=H+18.00m とする。
- 1FL=設計GL+100 とする。
- スラブ・小梁天端は FL-10 とする。
- 基礎梁天端は FL-700 とする。
- スラブ下等、埋め戻し箇所については十分に締固めを行うこと。
- [斜線]印は スラブ・小梁天端 FL-50 とする。
- [点線]印は スラブ・小梁天端 FL-100 とする。
- [縦線]印は スラブ・小梁天端 FL-150 とする。
- [横線]印は スラブ・小梁天端 FL-210 とする。
- [斜線+点線]印は スラブ・小梁天端 FL-230 とする。
- [斜線+縦線]印は スラブ・小梁天端 FL-500 とする。

- [斜線+横線]印は スラブ・小梁天端 FL-1010 とする。
- () 内数値はFLからの梁天端レベルを示す。
- 階段部は詳細図による。
- スラブ天(下)端と梁天(下)端あるいは側面においてレベル差がある場合は、打増しを行なうものとする。なお、外構廻り、バルコニー先端などの見切り縁と躯体は、原則として打増しにて調整するものとする。
- RC壁・間柱位置は 1階RC壁、鉄骨間柱、機械基礎伏図 による。
- 三方枠はL-65×65×6、GPL-6、2-M16とする。
- SS、SD、タラップ受けあるいはW1200を超える開口を受ける三方枠はt12とする。
- [点線]印は 収縮帯 を示す。
- 収縮帯はそれ以外のコンクリート躯体硬化後、後打するものとする。(膨張剤コンクリート)

- 梁・梁接合部にレベル差がある場合は、以下による。
- 土間スラブ、土間コンクリート：S-04「5.7スラブの打継補強等」による。
- その他：打増補強要領図による。

〈代表設計者〉
一級建築士 大臣登録 第52731号
柴 恭
〈構造設計者〉
一級建築士 大臣登録 第178097号
構造設計一級建築士証交付番号 第6499号
酒寄 光一

06国補都構 常陸太田市新総合体育館新築工事
S 建築工事
20 1階床伏図
株式会社 柴建築設計事務所

最終版 2024年12月